

---

# 東京ヒーローズウォー～断罪の死神・リン～

青 燐道

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東京ヒーローズウォーム 断罪の死神・リンク

### 【NNコード】

N8784Y

### 【作者名】

青 燐道

### 【あらすじ】

GREENにて連載していた作品。アプリ「東京ヒーローズウォーム」の一次創作。

実話がモデルのフィクションです。

## 登場人物（前半）

### 「主な登場人物」

リン（水城凜）…水氷の力を持つ、本作の主人公。神奈川国の裏切り者を断罪する自称「断罪の死神」。

ユイ（火乃結）…爆炎の力を持つリンの幼なじみ。一応ヒロイン。

カイ（石田戒）…ランキング上位の砂塵使い。無口で冷静（？）。

ザルツ（ザルツ・クロノス）…神奈川国・遊軍を率いる刻使い。ドイツと日本のハーフ。

アカリ（瀬田灯）…遊軍の直下部隊・ブルーサイクロンを率いる光闇使い。

セイラ（雷聖羅）…幼いながらもIQ200を誇る遊軍の軍師。迅雷使いだが、滅多に使わない。

スミレ（重藤董）…遊軍設立当時からいの姉さんの存在の重力使い。お嬢様との噂。

ムク（白南風諒太郎）…リンの幼なじみで埼玉国の疾風使い。兎に角、甘党。

ケンタ（迦具土健太）…遊軍施設のリンと同室の爆炎使い。おかしな訛り言葉を話す。

カグラ（野分神楽）…いつからいるのか全く不明な遊軍のムードメ  
ーカー。疾風使い。実は…

## 登場人物（追加）

シユウ（設楽修）…リンに断罪された音使い。後に埼玉の仕事民へと華麗に転職する。

カズマ（雨宮一磨）…埼玉国の迅雷使い。ツクヨミの彼氏。大変敬語。

ツクヨミ（南江月読）…遠征中に魂を碎かれ眠り続ける水氷使い少女。

ヒロ（鳴神宏樹）…千葉国きつてのイカレ頭。迅雷使い。カグラによつてトドメを刺された。

ミドリ（緑・ウェグセガー）…渡り鳥部隊の水氷使い。医術の腕は医者と同等。

ナギ（相良風）…ラジオFM神奈川国のパーソナリティを務めるカリスマDJ。疾風使い。彼の担当する「かしまし娘三人衆」は他国にもファンがいる。

## 登場人物（後半）

タツ（水城竜）…リンの従兄弟の水氷使い。魂を見分ける「眼」を持つ。

ナバリ（名張英慈）…忠実なタツの子分。爆炎使い。

カガミ（名務響子）…沖縄地区を統治する、名務一族の女性。「言靈」と呼ばれる音の能力を有する。

トモコ（布田智子）…カガミの身の回りの世話をする刻使い。

ジンナ（佐内迅那）…カガミの補佐をする迅雷使い。基本無口。

ヒョウ力（太田氷華）…沖縄地区前線部隊の隊長。水氷使い。

ソウヘイ（神田創平）…沖縄に引っ越してきたばかりでこの騒動に巻き込まれた砂塵使い。

セーマ（柳沢静麻）…「断罪の死神」を名乗る砂塵使いの少年。居合の使い手。

キヨウ（土岐夾）…おつとりした刻使い。だが、その力は凄まじく熊を一撃で倒す、らしい。

トウミ（来栖東美）…妖艶な爆炎使い。来栖右京の遠い血縁だとうが、詳細不明。女王様。

マサキ（市恵雅樹）…遊軍直下部隊「黒影会」の生き残り。重力使い。得意のマジックを用い、敵を翻弄する。

スモモ（李春蘭）…どつから湧いて出たのか詳細不明の自称中国人爆炎使い。明らかに、日本人。

アマギ（碓氷天城）…クール&ドSな氷使い。二ヒルな性格のせいかマサキと対立する。

シノブ（澤田忍）…ケンタの出会った千葉国の疾風使いの少女。重い病を患っている。

前夜（前書き）

書き下ろし

元々、東京23区の取り合いで興味は無かつた。ただ、毎日が平凡に過ごせれば良かつた。

あの人気が、俺の前に現れるまでは…。

「おや、アンタ。どうやらヒーローの素質があるみたいだねえ」

不思議な着物を着た少女が、俺に微笑む。

「アタシはサクラ。どうだい？アタシに、東京統一の為に、力を貸してくれないかい？」

スッと、少女が手を差し伸べた。何となく、俺は手を伸ばす。

「暇だから、参加します」

「フフフ、なかなか面白い事いうね。じゃあ、アンタの力を引き出してあげようじゃないか。なあに、怖がる事はないさ。覚醒の痛みは、一瞬だよ。」

神奈川国、水城 凜。  
超能力者、ヒーローの力に覺醒。

>  
続<

さて、長い戦いが始まる

## 始まり（前書き）

長くなりますが、どうぞ、お付き合いくださ

## 始まり

いつから日本はこうなったのだろう。

その問いに、「東京が壊滅してからだ」と誰もが答える。いつしか千葉、埼玉、神奈川の三国の能力者が、東京23区を取り合って始めた。

\*

サクラという少女に導かれ、一人の少年が神奈川国に身を寄せた。名をリン。青い髪で、眼鏡をかけた能力者<sup>ヒーロー</sup>の少年である。つい最近、水氷の力に目覚めたリンは、何も解らず戦い始めた。

「…リン、また派手にやられたな」  
「ええ、また返り討ちにあいましたよ」

全身傷だらけで、お世話になつてゐる遊軍施設に帰ると、そこには一人の青年が待つていた。

彼は、通称カイ。砂塵の能力者である。リンは初期からハイランカーのカイとパートナーを組み、技を磨いていたのだ。

「無茶…するなよ」  
「はい」

リンは微笑み、部屋に帰る。

身体中が痛い。傷を消毒し、横になった。

\*

能力に慣れてきた頃、リンは一人の少女とパーティーを組んだ。彼女はコイ。赤い髪、ゴーグルがトレードマークのおてんば娘。コイとリンは、嘗ての同郷の友だつた。コイも最近、能力者として覚醒したらしく、リンが施設に呼び寄せたのだ。

携帯で、自らのランディングを確認しながら、コイは叫んだ。

「すぐリン君を追い越すんだから！」

「負けてられませんね。取りあえず、俺は目指せ四桁かな」

「私は目指せ、1000番台…」「大きく出ましたね」

この当時、まだランディング16000番台だったリン。

負けてたまるか。リンは、少しだけ対抗心を燃やし、更に腕を磨く事にした。

別れ（前書き）

自由だあああ

## 別れ

断罪の死神。

自らを、そう名乗り始めたのは、あの人を失つてからだつた。あの時から、俺は少しづつ、壊れていつた…。

\*

リンが、ユイとパーティーを組んだ一週間後、カイは一枚の置き手紙を残し、施設からいなくなつていた。荷物も、何もない。部屋は、蛻の殻。机の上の手紙を、ユイは読んだ。

「亡命します…だって」

「……」

亡命。つまり、カイは他国にいつてしまつたのだ。

白い紙に、たつた一行。カイの残した筆跡を見てるうちに、リンの頬を何かが伝つた。

ああ、俺が弱いから、カイは愛想尽かして去つてしまつたのか。強くなりたい。

強くなれば、カイは戻つてくるかもしれない…。

「ユイ…」

「なに? リン君」

「強くなりたい」

その日から、リンはがむしゃらに戦った。能力を限界まで使い果たし、融合を繰り返し、ランキングの低い能力者を片つ端から奇襲した。

遊軍の作戦に積極的に参加し、リン更には戦い続けた。然し、「強くなりたい」という気持ちは、いつしか、ただ「闘いたい、敵を潰したい」という気持ちだけになっていた。

リンは、どこかが壊れていたのだ。

別れ（後書き）

あんま壊れてない気が…

サクセスの絆（前書き）

伏線

## サクラとの絆

絆とは何か。

友とは何か。

そして、敵とは何か。

### 「絆イベント・サクラとの絆編」

某日。北区にて、埼玉に奇襲をかけていたリンとユイは、偶然桜色の鈴を拾った。

「何か拾つた」

「鈴だね。いい音色だねえ」

「ぶん回して、チリンチリン鳴らす。いい音だ。

「おや、いい音色だねえ」

「ギヤアあああーー出たあああーー！」

音色に誘われたのか、背後からフェイトキー・バーのサクラ登場。

神出鬼没な彼女に、二人は本気で驚いた。

サクラよ、気配消すな。コラ。

「どうだい？ 腕試しでもしないかい？」

「…く？なぜいきなり？」

にっこり笑うサクラ。

腕試し？一人は顔を見合せた。

最近ランギングが17000に上がったリンは、腕試しを受け、

…返り討ちにあつた。

強い。果てしなく強い。

「鈴は貰つていいくよ」

そしてサクラ、桜色の鈴を強奪して去つていいく。放心状態のリン。

「リンくーん？おーい」

ユイは、リンの顔の前で手を振る。反応が無い。

暫くして、我にかえつたリンは、東京湾に向かつて叫んだ。

「勝てるかボケえええ！！」

その後、リンはまた桜色の鈴を見つけたが、サクラ出現を懸念してか、携帯電話のストラップにしてポケットの中に封印した。

サクリヒの絆（後書き）

サクラさんあああんーー！

遊軍（前書き）

最盛期の遊軍がモデル

強さとは何か。

それを解らず進み続ければ、いずれ破滅する。

解つてゐる。

解つてゐるけど、

解らないフリをした。

\*

遊軍会議室。リンはスコップを抱えて入室した。

「失礼します。今日は奇襲の日ですよね。メールが来たので「…リンさん、何、そのスコップの量」

そう。リンが抱えていたスコップは一本ではない。計7本。土木作業でもするんですか、アナタは。

「スコップ7本新調やっぱーー！」

「やっぱーーー！」

「あ、スコップで思い出した。私耐久率無くなつたスコップ20本位持つたままだーーー！」

「カグラちゃん、売るかスキャンしといでよ…」

無駄に盛り上がる会議室。そこに、隊長が入ってきた。一気に静まり返る室内。

机に電子パネルが置かれ、そこに現在の東京23区の占領状況が記

されていた。

赤が千葉、黄が埼玉、青が神奈川、そして灰色が非占領区と分かり易く色分け表示されている。

「ああ、ビニに攻め込む?」

まさかの無計画。全員が携帯電話で国の状況を確認した。

「埼玉領の杉並区が57%ですよ?」

「千葉領の葛飾区は30%!」

「狩る?潰す?ひやは」

「うーん、もう少し%下がらないかなあ」

「無理じゃね?」

「奇襲、奇襲」

「えーーい、黙れい。取りあえず様子を見る為に待機!」  
「びととなつたら夜行も動かすから宜しく」

別部隊を動かす。隊長のその発言にざわめく会議室。  
それから数分後、%が全く下がらないので、遊軍全員で葛飾区へと向かつた。

「リンさん」

「何だい?セイラ」

白髪をツインテールにした少女、セイラがリンの服の袖を掴む。  
彼女は迅雷の使い手で、幼い見た目に合わず、ランキング1900  
番台の凄腕能力者である。

「無理、しちゃダメだよ。つてコイさんが言つてた」  
「解つた。ありがとうございます。」

セイラに微笑むリン。

「ん~、その表情、キュンッときたよ  
」

「?  
」

「皆の者、出撃じゃーーー！」

号令がかかった。

各自、武器を持ち、一斉に敵陣へと切り込む。

「ユイ、必ず帰るからな

リンはそつ眩き、スコップを握り締めた。

遊軍（後書き）

懐かしいなあ  
…

## イチゴ狩り（前書き）

サクラさんは、俺たちのエングル係数を上げる気だーーー！

## イチゴ狩り

サクラの気紛れ。

仄かに甘酸っぱい、青春の記憶。

貴方は、甘いものが好きだった。

〔番外編：リンくんのイチゴ狩リツアー〕

杉並区。リンとゴイは、他国国民であり友である、疾風の使い手ムクと会った。

ムクは籠いつぽこのイチゴを食べている。

「あー、ムクくん。どうしたのソレ？」

「（もぐもぐ…）ひやふらしゃんにもらひひや

「ムク。取りあえず、『ゴックン』しよう。な？」

口いっぱいに詰めたイチゴを飲み込み、ムクは満足げである。

「いや、さりと寄り襲かけてたら、サクラさんにお賣つたんだ。白いイチゴが特に絶品…」

「サクラ、また甘いものを配布してゐるのか」

「前はマシユマロと飴だったよね」

サクラは神出鬼没で、何を考えているのか、全く解らない。

幸せそうにイチゴを食べるムクと別れ、二人はとある施設に奇襲をしかけた。

「はい、6人斬りー」

「私5人斬り」

「おや、アンタたち、いいところに」

背後から声。

本当に出た。フェイトキー・パーサクラさん。

「ユイには、これあげようかねえ」

サクラは、笑顔でユイにクッキーを渡した。そのクッキーというのが、ユイの顔をデフォルメした可愛らしいものだった。

「わ、私の顔だ…！」

「さあ、リン。アンタはこれだよ」

イチゴか？イチゴなのか？  
だが、期待は打ち砕かれた。

リンが受け取ったのは、ブラッドベリー・ランス。（武器）  
食べ物ですらない。てっきり、イチゴをくれるもののだと思つていた。

「あ、あの…サクラさん？」

「じゃあね」

ルンルンと帰っていくサクラ。リンの隣では、ユイがクッキーを頬張っていた。

「せんのつイチゴ味だあ、おひー」

「…共食い」

リンはポツリと呟いた。

だが、ぶつちやけイチゴ貰わなくて正解だつたかもしれない。その日の遊軍の会議室が、地獄だつたから…。

「うわーん、カグラちゃん。会議室がイチゴ臭いよお…（泣）」

「みんなサクラさんにイチゴ貰つて、食べながら会議室に来たからね」

「…帰つていー？」

暫く、イチゴはいらないな。

会議を早退し、リンは施設に帰ると、ブライヂベリー・ランスを簞笥にしまつた。

## イチゴ狩り（後書き）

もういちごはいらないでごめん

死神（前書き）

性格なんです

## 死神

許せなかつた。

俺を置いていつてしまつた、あの人。が。  
だから、同じ事をする奴が、憎くてしょうがなかつた。

断罪が、単なる、自己満足だつて事も…解つていた。

\*

満月。

一人の少年が国境を越えようとしていた。

亡命者である。

あと少し。あと少しだ。

「…どこで行く氣だい？シユウ」

「り…リン…さん…？」

ビルの影から、現れたのは、黒い外套を纏つたリン。  
眼鏡越しの瞳は、完全に獲物を狙う狩人だつた。

「お願いです、リンさん。黙つて行かせて下さい。もう神奈川のや  
り方にはついていけない」  
「そんなの、どうでもいい」

「…え」

リンは笑う。冷たい笑顔で。

握りしめたスコップを引きずり、シユウに近付く。

「俺は…断罪の死神。他国への亡命者を狩る者。亡命者は、その身を以て償つべし」

「ひ…！」

一瞬だった。ダイヤモンドダストがシユウを包み、動きを止める。氷の刃が体を切り裂いた。

シユウが倒れ、動けない事を確認したリンは、攻撃を止め、トドメを刺さなかつた。

「…リン…やん」

「断罪完」

そう叫びると、リンはその場を立ち去つた。

\*

施設に戻つたリンは、部屋に帰るなり、床に倒れ込んだ。同室である爆炎の使い手ケンタが、リンを指で突つつく。

「おー、リンお帰り」

「…」

「リン?生きとる?」

「…あ、ああ…」

力無く返事するリン。ケンタは呆れ氣味にリンを引きずつて運び、ソファーに投げる。

「…痛い」

「無理してゐるだろ。最近、断罪ばかりして疲れとる」

「…」

「ユイさん」、迷惑かけんなよ

「…ああ」

この時既に、リンの悪名は一部で有名になっていた。自らを“断罪の死神”と名乗り、亡命者ばかりを狙う。他国からの評価も良い訳がない。

「こんな事ばかりしてると、指名手配に載るぞ」

「解つてる」

「気をつけろよ」

解つてる。いつか、命を狙われるかもしない事くらい。ふとケンタが、リンの外套を引っ張った。

「つか、その黒いマント脱げ。暑苦しい！」

「や、やめる、触るな！つか服まで脱がそうとするな…！」

「お疲れなんだろ？ほら、減るもんじやないし」

「やーめーろー！凍らされたいか貴様あ…！」

「リンくーん、さつきカグラちゃんからお菓子の差し入れ…」

何というタイミングで入室。ユイ、とんでもない光景に遭遇。

「…ケンタくん」

「へ」

「燃えぬきひー！」

直後、火炎の嵐が起きたのはいつまでもない。

**死神（後書き）**

リンとケンタをカッピングとして制てい（殴

誰そ彼の歌（前書き）

歌つてます

## 誰そ彼の歌

「いつか無くした、あの日の夢。もつ一度立ち止まり探してみよう」

：

リンが歌っているのは、聴いた事の無い歌。どこか寂しい、その歌詞が印象的だった。

「リンくん。それ何の歌？」

「ん？昔、俺達の中で流行った歌だよ」

そう呟き、また歌い始める。

流行った？そんな歌、聴いた事ないんだけど。ユイがそういうてもリンは構わず歌い続ける。

そして、リンは必ず、2番（だと思われる）の途中でいつも止めてしまう。

もどかしい。全くもつてもどかしい。

「リンくん、途中で止めず、最後まで歌いなさいよー！」

「いや、そこから先の歌詞が覚えてなくて、歌えないんだよ」

「題名は？調べるから」

「忘れた。随分古い曲だからね」

そういって、再び一から歌い出す。

\*

哀しい歌に込められた  
「私を救つて欲しい」という願い。

きっといつか、

誰か現れ

この絡みつく鎖を

解き放つてくれるのだと

信じた

誰そ彼の歌（後書き）

解る人、いそうにない

裏切り者（前書き）

ほほ実話

ダウトなこの世界。

どこの裏切られるか解らない。

そう、

たとえそれが戦友でも。

\*

その日の奇襲戦は、様子がおかしかった。  
隊長の号令で向かった千代田区。最初の異変に気付いたのは、重力  
の使い手・スミレだった。

「ザルツ。ちょっと宜しいかしら？」

「なんだ、スミレ」

「携帯の情報が、おかしいですわ。先程、下降していた占領率が回  
復してますの」

「なんだと…？」

刻の使い手・ザルツも、自らの携帯を確認する。

数分前の千代田区の占領率は20%。然し、今は35%。  
占領率が回復しているのは明らかだった。

「何故だ…」

「ザツちゃんあん…！スミちゃんあん…！」

思考は、カグラの叫び声で打ち切られる。カグラとリンは傷だらけ  
だった。

「カグラ、リン、どうした！？」

「敵が、敵が強過ぎるよーーー！ハイランカーしかいないよーーー！」

「ザルツさん。俺達、完全に待ち伏せされましたよ」

「まさかっ！？」

予想外の事態だった。リンは負傷した腕の傷口を布で縛りながら呟いた。

「…やつぱりな

「リンちゃん？」

「前々から薄々気付いてましたが、今回ので確信しました。遊軍内部に…諜報<sup>スパイ</sup>がいる」

諜報。そんなのいるわけないと、ザルツは否定したかった。だが、今回の状況を見て、否定が出来ない。

「俺は、会議室に戻つて今回の件を

「待て」

立ち去るのをするリンを、ザルツは止めた。リンの表情が険しくなる。

「リン、今回の件、迂闊に言わない方がいい

「何故です！？裏切り者がいるんですよ！そういう奴は、大人しく断罪…」

「今言えれば、遊軍どころか別の部隊も動けなくなる。諜報が本当にいるかも確信が無い。いたら、確実に敵の思う壺だ

「…つ…！」

言つてゐる言葉理解出来る。

だけど

だけど…裏切り者は、許せない。

手を強く握り締め、爪が皮膚を切ったのか、血が滲んだ。

「解り…ました。今日は、もう帰ります」

「カグラ、お前も一緒に帰れ」

「うん」

リンはカグラに寄り添われ、施設へと帰つていった。とあるビルの屋上。一人の少年がそれを見ていた。

「リン…ね。随分勘のいい奴じやんか」

ニヤリと笑うその瞳は、赤く血走っていた。

「アソツを潰すか…」

裏切り者（後書き）

やつた奴はすぐ居なくなつた

蒼の記憶（前書き）

作者は雨が嫌いです どうでもいい

## 蒼の記憶

雨が降ると思い出す。

貴方と共に過ごした日々。

「蒼の記憶」

「リンは、どうして戦う？」

道路整備の仕事中、カイはリンに聞いた。穴掘りの手を止め、少し考える。

「そうですね…守りたい人がいます。俺は、その人の為に闘つてます」

「守りたい人？」

「ええ。故郷に置いてきた、俺の大切な人」

赤い髪のおてんば娘。ずっと、リンを支えてくれた存在。

「恋人か？」

「うーん…遠からず、近からず」

「…？」

「彼女は、俺の大切な相棒です」

そういうて、リンは盛大にスコップを振り回す。

本日のお給料、1800ブラッド。納税額が多い為、さほどお金に

ならない。

「明日は丁作員でもやつて来よつかな…」

「もつと割に合わないぞ?」

「じゃあ、カイさん。奇襲でもいきますか?」

「ヤリと笑うリン。カイも、やれやれと言わんばかりの苦笑を浮かべ、リンの肩を叩いた。

「奇襲行くなら、付き合いつ

「ありがと」

そういうて、笑いあつていた日々。  
もう、戻る事のない過去。

「カイ…」

今、貴方は、どこにいますか?

答えは返つて来ない。

ただ、雨音だけが、響いていた。

## 蒼の記憶（後書き）

「このカイは、作者の元恋人がモデルです。」（笑）

薄れゆく影（前書き）

全くその素振り無かつたやんけ

ユダは誰だ。  
解ってる。例え誰であっても、

潰すのみ。

\*

「午後2時、一緒に新宿へ襲撃しに行きましょ。待つてます。カグ  
ラ」

リンの携帯に一通のメールが入った。チリンと携帯に付いた鈴が鳴  
る。

「リンくん、お出かけ?  
「ああ。共同で襲撃だ」

ユイが話かけてきた。リンは、筆筒からブラックベリーランスを取  
り出す。

(珍しい。スコップじゃないんだ)  
「一緒に行つてもいい?」「やめとけ。今日は大人しく部屋にいろ  
「ぶー」

頬を膨らませ、捻くれるユイ。

黒い外套を羽織り、玄関へ向かうリンの後ろ姿が、ふと一瞬薄れてみえた。

（え？）

振り返った時には既に、リンは立ち去った後だつた。

「…リンくん」

異様な不安が胸に広がる。ユイはただその場に立ち尽くしていた。

\*

新宿区某所、廃墟にリンの声が響く。

「出てきなさい、カグラ」

カグラが、物陰から現れる。その腕には、千葉国民を表す赤い腕章。

「カグラ、やはり貴方が諜報でしたか  
「ごめんね」

そう。カグラが諜報だった。薄々気付いていた。

泣きながら謝るカグラ。その横から、白髪の少年が現れた。  
確か、千葉国の…ヒロといったか。

神奈川国の内部では危険人物として、悪名高い。

「テメエの事はカグラから聞いてるぜ？俺たちの仲間をノして回つてるつてな」

「そういう戦いだからな。文句ならこの時代にいえ」

「ハツ、田障りなアンタには消えて貰うとするか

パチンと指を鳴らすヒロ。

物陰から何人もの人間が現れる。リンは一瞬にして取り囲まれた。

「！」で消える！――

ヒロの声と共に一斉に襲いかかってきた。外套を翻し、槍を構える。

「…来い、相手してやる

リンはニヤリと笑った。

赤き一閃。風切り音と共に上がる悲鳴。

氷の嵐が、敵を包む。あるものは氷漬けにされ、あるものは切り裂かれた。

「我がダイヤモンドダストの前に平伏せ……」

「調子に乗るんじゃねええ――」

ヒロが叫ぶ。ほぼ同時に、雷鳴が轟いた。

（何……！？）

リンは強大な雷をヒロに受け、膝をつく。ヒロは、水氷使いが最も苦手とする迅雷の使い手だったのだ。

「形勢逆転つてか？」

「…う」

「じゃあな、死神さんよおお――」

死を覚悟し、リンは瞳を閉じる。

ユイ、ごめん

その時、

「大勢で一人を狙つとは、感心しないな」

聞き覚えのある声。そして砂塵の嵐が吹き荒れた。

薄れゆく影（後書き）

さて、ヒーローの登場だ

砂塵の渡つ鳥（前書き）

真打ち登場ーー！

## 砂塵の渡り鳥

貴方を信じていた。

疑わなかつたといえど、嘘になる。

だけど、

俺の背を預けられるのは、貴方だけだ。

\*

砂塵が止み、リンの田の前に現れたのは、カイだった。

「か…カイ…?」

「おいおい、カイ様よお。狩りを邪魔すんな」

ヒロの声に、苛立ちが混ざつている。カイがリンの方をチラリとみた。

その瞳は、優しい。

まさか…

「…」

「シカトすんなよー。オレサマの邪魔をするつて事は千葉国の邪魔をするつて事だぜ…?」

「それがどうした」

あつやりいいのけるカイ。腰に上げていた日本刀を抜き、ヒロに向けた。

「元より、千葉国に忠義はない。俺は、強くなる為に《渡り鳥》になる事を選んだ。ただ、それだけの事」

「《渡り鳥》…カイが？」

渡り鳥部隊、通称《渡り鳥》。三国を渡り歩く放浪の民。少人数の精銳部隊で、ある日、フツと現れて、去っていく。過去に、リンもミドリという《渡り鳥》の少女に出会っていた。

実力派揃いだが、出会える確率は少ない。

「ふざけんな！《渡り鳥》なんざ、所詮根無し草の裏切り集団じゃねえか！」

「随分と忠義の深い事だな。だが、俺のように向上心が無いお前は、一生幹部候補止まりだ」

「！？！」

カイが、毒を吐いた。

ヒロは逆上し、落ちていたバールを拾い上げる。

「つぐづく氣に入らねえ野郎共だ。もついい、同じ国民だらうが、二人纏めて始末してやらああ！！」

空気中の静電気がヒロの怒りに呼応し、火花を散らす。

「リン…」

「え」

「お前は、俺が必ず守る」

そういったカイは、刀を手にリンの前に立った。

「カイ」

どうしよう。涙が、止まらない。

貴方も、守るための力が…欲しかったんだね。  
だから、神奈川から去つて、『渡り鳥』になった。  
ごめん、疑つてごめん。

「カイー！」

「！？」

リンはブラッドベリー・ランスを持ち、カイの隣に並んだ。

「俺だつて、戦える。守られてばかりの、あの頃の俺じゃない」

「…そうか」

カイとリンは笑っていた。そしてほぼ同時にヒロに向かつて叫んだ。

「「かかつて来いよ、この静電気野郎！」」

砂塵の渡り鳥（後書き）

最も最強のタッグです

去つたし者（前書き）

格好いい事いいつつ、殆ど戦つてない事実

## 去りにし者ども

もし私が目覚めなくとも

好きだといつてくれるでしょうか…？

\*

大半の手下が倒れている中、ヒロは哄笑していた。そして、物陰に隠れていたカグラに向かつて叫ぶ。

「カグラああ！テメエも戦えや！－テメエの疾風で砂野郎を吹っ飛ばせ！－！」

「！－！」

スッと、カグラが物陰から現れる。その瞳は、

「カグラちゃん…」  
「リンさん」

カグラの手には、金属バット。大きな瞳からは、一粒の涙が流れた。その直後、リンが一步下がる。

「行け！カグラ…ッ」

スッコーン！－

金属音が、廃墟に鳴り響いた。  
そして、ドサリと倒れるヒロ。

「アタイに命令してんじゃねえよ、ガキがあーアタイを鬼神楽と知つての狼藉か！？」

カグラが吠えた。その瞳は、朱い。  
ポカーンとなるカイ。そして、盛大に溜め息をつくリン。

「鬼神楽…。確か、千葉国の大だたる疾風使い。記憶が正しければ、鬼神楽は男だつた筈だが？」

「ジエンドークリーック、行つたんじやないかな  
「なるほど」

内輪解決。カグラは赤い腕章をむしり取り、倒れたヒロに投げつけた。

「テメエらのやり方には、ウンザリだ！」

一通り叫んだ後、リンとカイの方を向き、苦笑いを浮かべる。  
「…リンさん。『めんなさい』  
「帰るうか」

カグラとカイの手を取り、微笑むリン。

「勿論、みんなで」  
「リン」  
「リンさん」

バンッ

火薬の破裂音。

硝煙の臭い。

直後、脇腹に激痛が走った。

「え」

全身から力が抜け、リンは床に倒れた。

「ざまあみやがれ」

「……！」

ヒロが、隠し持っていた銃を撃つたのだ。

カグラは、カイから日本刀を奪い、ヒロにトドメの一撃を刺す。

「リン……」

「油断……した」

カイは倒れたリンを抱き上げ、撃たれた箇所を布で押さえる。だが、傷口からは、とめどなく血が流れ出していた。血が、止まらない。

「カグラ……」の近くに《渡り鳥》のミドリがいる。そいつを呼んで  
来い！」

「わ、解つた」

カイに促され、カグラは走り出す。

「…カイ」

「！？」

掠れた声でリンがカイを呼ぶ。

リンは、懐から自分の携帯を取り出した。

桜色の鈴が付いた、携帯電話。その携帯を握る指先は酷く冷たい。

感覚が、殆ど無いに等しい。

視界が次第にブラックアウトしていく中、最期の力を振り絞り、カイに携帯を押し付けた。

「これを、ユイに……渡して

「な、何いって…」

「ユイを…頼、んだ…」

リンの手から力が抜け、携帯が滑り落ちる。  
床に叩きつけられた携帯の、鈴がチリンと鳴った。

去つたし者ゆく（後書き）

この次は連載とは少し違う展開を予定しています。

わざなりを書むす (前書き)

一部書き下しです

## わななりを言わす

わひと、どんな形で出会つても  
必ず、私は貴方に恋をする…

\*

リンとの連絡が途絶えた。  
ユイは携帯で必死に電話をかける。  
かからない。

「リン君…リン君…！」

何度も、何度もかけ直した。ユイは願つた。電話に出て、元気な声  
を聞かせて欲しい。

ふと、どこかで着信音がした。  
昔流行つたという歌の着メロ。リンが好きだった曲。  
辺りを見渡すと、傷だらけの金髪の青年が、携帯を握りしめてユイ  
を見ていた。カイだ。

カイはユイに近付き、そつと携帯を差し出す。

「…あ」

持ち主の居ない携帯電話。それが意味する事を、ユイは気付いてしまった。

「リン…君」

ユイの瞳から、涙が零れた。  
彼は、もう帰つて来ない。

「…守れなかつた」

カイは苦しそうに呟く。

コイはカイを優しく抱き締めた。

話の一部始終を聞いたコイは、暫く泣いていた。まず、気付くべきだつた。あの口に限つて、愛用のスコップではなくブラシドベリーランスを持つていつた事に。コイは徐に、リンの携帯を開けた。

「あ

“必ずコイの所に帰る”

メール画面のまま閉じてあつたのだろう。一行、そつ書かれていた。

「リンの…馬鹿あああああ…！」

\*

その頃、遊軍に、一つのドッグタグが届けられた。ザルツは、ドッグタグの裏を見、硬直する。

「…だれの？」

そう聞いたのはセイラだった。

ザルツは、素早くドッグタグをズボンのポケットにしまい込む。

「他国のだ」

「うそ。ドッグタグの色、神奈川の青だったもん。仲間が、しんだの？」

「ああ」

「だれ？」

「…リンのだ」

\*

リンの遺体は、水無月塔子＝シユナイダーによつて研究所へ運ばれたらしい。

今でも、亡くなつた仲間達は損傷が激しくない限り、今後の能力研究の為と、シユナイダーの元へと運ばれていつた。

カイとユイは、必死にリンの遺体の返却を求めた。

だが、それは認められず、彼の遺品であるブラッドベリー・ランスだけが、ユイに返却された。

研究所からの帰り道、ユイは無言でブラッドベリー・ランスを抱えていた。

「…

「ユイ」

「もう、帰つて…来ないんだよね…」

「ああ

ポツリと地面に落ちる。

それは空からだった。

雨が、降り始めたのだ。

「アンタが…カイが神奈川を去らなきゃいけなかつた…リン  
だつて、死なずに済んだのに、ビリして…ねえ、ビリしてアン  
タが生きてんのよッ!!」

「…」

「リン、ずっと『強くなれば、カイは帰つてくれる』って  
…！アンタが…アンタが全部悪いんだ…！」

雨が強くなる中、コイはカイに向かつて叫んだ。

「そりだな…全部、俺が悪い。だけど、俺もお前達を守りたくて、  
強くなりたくて、神奈川を出た。いつなる位なら、理由を述べるべ  
きだつた」

「…ッ、今更よ…！」

「ああ。だから、今度こそ、お前達を、守るから

僅かに掠れたカイの声。涙なのか、雨なのか、カイの頬を伝う一筋  
の涙。

失ったものは返らない。

解っている。

それが戦争なのだと。

だから

だから

強くなりたいと願った。

「私はアンタには守られない…。私は、生き続けて、リンが守りたかつたものを…守るだけ」

「…」

「その守りたい対象に、…カイも入ってるから、せいぜい死ないようにね」

「つーー！」

風が吹く。

雨雲を浚い、僅かに太陽の光が差し込む。

「リンのバカあああ！！カイのバカあああ…ぜつつたい、許してやらないんだからあああああ！！！」

形見となつたブラッドベリーランスを抱き、コイは空に向かつて叫んだ。

吹つ切れたようなその表情は、まるで…



それなりを言わす（後書き）

次で第一部が終わります

死神の再生（前書き）

一部書き損じた（笑）

## 死神の再生

だから戻ろう、あの場所まで

仮初めの今日から踏み出す為に

\*

俺は暗闇の中にいた。何故、ここにいるのか解らない。ふと、どこからか鈴の音がした。

「いい鈴の音だねえ」

誰かの声がする。  
俺は振り向いた。

いた、彼女だ。

「アンタには、まだ消えられちゃ困るんだよ」

「…やっぱ死んだのか」

「ああ、肉体はね。魂は、その鈴が現世に繋ぎ止めている」

サクラは俺のもつ鈴を指差した。

死んだのなら、もう、誰も守る事は出来ない。  
落胆する俺に、サクラは微笑む。

「リン、もう一度、アタシに力を貸してくれないかい？東京統一の為、いやアタシの為に…アンタの力を貸しておくれ」

「え、でも…俺、死んだんだろ」「なあに、肉体ならアタシがどうにかしてあげるよ。さあ、その鈴をアタシにおくれ。守る力を、アンタにあげるよ」

守る力。

みんなを…コイを、守りたい。

俺は、何も言わず、サクラに鈴を差し出した。

「いい子だ。色々不憫になるけど、我慢してくれ」

鈴の音が鳴る。

一筋の光が、現れた。

「さあ、水城凜。行つておいで。東京へ」

「ありがとうござります」

俺は、サクラに礼を述べ、光へ…東京へと向かつた。

\*

月光の下、一人の少女が走っていた。

その少女を追いかける埼玉国の幹部。そう、彼女は亡命者。

「チツ…やべえ  
「ツク三ツやん!」

少女の前に、一人の少年が現れた。少女の手を引き、物影へと身を潜める。

「カズマ！？」

「ここはボクが引き受けます。その間に貴女は逃げて下さい」

「でも」「神奈川に、大切な人がいるのでしょうか？ボクは大丈夫」

「カズマ…」

「さあ行って」

「…ツ…悪い…」

少女は走った。少年はスコップを握り、同朋の前に立ちふさがる。

「大好きだよ、ツクヨミ…いや、リン」

\*

サクラの導きにより、現世へ戻ったリンは、ツクヨミという少女の体に宿つた。

ツクヨミは、過去の遠征で敵兵に魂を打ち碎かれ、抜け殻だった。それ以来、植物状態で眠り続けていたらしい。

目覚めたツクヨミの異変に最初に気付いたのは、彼女の恋人のカズマだった。

「君は誰だい？」

「俺は…リン」

そう答えると、カズマは少し寂しげに微笑んだ。

神奈川国に帰る。そう告げた時も、カズマは静かに頷き、背中を押してくれた。

ツクヨミはリンと同じ氷氷使いで、能力も申し分ない。

リンは、ひたすら走った。

そして、国境付近。赤毛の少女がリンに手を振つていた。

「亡命者さん。いらっしゃよーーー。」

「ーーー?」

少女はコイだった。リンは立ち止まる。そして

「コイ

呼びかけた。コイはキョトンとなる。

「え、何で私の名前を  
「これで、解る?……いつか無くした、あの日の夢。もう一度立ち止  
まり探してみよ?」  
「ーーー?」

リンがよく口ずさんだ歌。コイは、完全に動搖していた。

「え、あ、あの」  
「姿は変わったけど、俺だよ。コイ」  
「リン…くん?」  
「携帯に書いてあつただろ?必ずコイの所に戻るつー」

コイの瞳から、一粒の涙が零れた。

「つさ  
「嘘じやない」

「だつて、リンくんは死んだもん！…」

「サクラがね、この身体に転生させてくれたんだ」

リンはユイに近付き、そつと抱き締めた。

「ただいま、ユイ」

「あ…」

その瞬間、理解した。器は違えど、魂がリンである事を。ユイは泣きながら、ギュッとリンに抱き付いた。

「おかえり、リンくん！…」

「ただいま」

\*

強き願いは運命さえ打ち破る

人の意思とは強きもの。

そして、人は運命を変え、新たな世界を切り開く。

>第一部、完く

死神の再生（後書き）

第一部は終わり。

日本文化 (通論)

おのれとの戦

## 「ニ女計画?」

「いやー、まさかリンくんが女の子で帰つてくるとは…」

施設の一室。リンの長い髪をとかしながらコイが呟いた。

「しかも、私よりナイスバディ。う、羨ましきるーー。」

「コイ…」

コイはリンの髪の毛を黒いリボンで結つ。しかもポニーテール。そして、どこからか、ヒラヒラのゴシックロリータを出し、リンにあてがつ。

「コイ、なにをしてる」

「リンちゃん、着て(はあと)」

「却下」

ほほ即答。コイがブーイング。

「女の子はお洒落しなきやーー。」

「却下」

「カイだつて見たい筈だよーねえ、カイーー。」

いつからいたのか。カイが部屋の入り口で突っ立つてゐる。

「…」

「カイ。反論してくれ」

「…(ぐつ)」

「オイ『ラ。なに親指立ててんねん』  
「さあリンちゃん。着てみるみそ」

逃げ場無し。抵抗しようものなら、ランキング4000番目にランクアップしたユイに焼き殺されるだろ？  
大人しく、ゴシックロリータを着始めるリン。

「ユイ、着にくい」  
「ほら、ばんざーい」  
「胸が…キツい」  
「胸元のリボン緩めようか」  
「足元がスースーするぞ」  
「二一ハイ履けば大丈夫」

暫し格闘。

リンがやっと着終わった頃、カイは、鼻血を出して倒れていた。

「カイ、な、何故だ！！何故鼻血を出して倒れている！？」  
「着替え…全部見てたのね」

：右京さん。今日も神奈川国は平和です。

乙女計画? (後書き)

ようやるわ (笑)

いけいけ、僕らのナギちゃん（前書き）

ナギちゃん＝汝くん

## いけいけ、僕らのナギちゃん

それは、嵐というべきか。

神奈川に、一陣の風が来た。

\*

東京、某所。つか、リン達の住む施設。

その日、施設に大量の機械が持ち込まれた。

「ユイお姉ちゃん、あれ」

「随分大量ね。何かしら」

偶然、玄関掃除をしていたユイとセイラは、その光景に首を傾げる。それらの機材を運ぶのは、見覚えの無い少年だった。

「あの」

ユイが恐る恐る声をかけると、少年は付けていたイヤホンを外し、にっこり笑った。

「こんちわーっす

「！」、「こんにちわ……ん？」

どこかで聞き覚えのある声。ユイは首を更に傾げた。

「ユイお姉ちゃん? びつしたの?」

「いや、なんか聞いたことある声だったから。どこだつけ?」  
名前が出てこない。掃除が手につかないほど、ユイは悩んだ。

そこに、リンとカイが奇襲攻撃を終えて帰つてくる。

「ただいまユイ」

「ねえ、思い出せる?」

「ごめん、ユイ。それだけの単語で答えを出せる程、俺はテレパシー率高くない」

「だよね」

「…いいのか、それで」

リンとユイの会話で、少々呆れ氣味になるカイ。

ふと、先ほどの少年が機材を取りに玄関に戻つてきた。

明らかに、カイの顔色が変わる。

「!?

「カイ、どうしたの?」

「ナギ様!貴方、FM神奈川国の人気ナリティーのナギ様ですよ  
ね!!」

「へ?うんそうだけど」

「生ナギ様だあ!いつも、“かしまし娘三人衆”聞いてます!ファンです!」

カイが。あの冷静沈着なカイが興奮してゐる。（笑）

「FM神奈川国つてあれだよね」

「うん。ラジオだね」

「かしまし娘三人衆つて、あれだよね」

「うん。DJナギと神奈川三人娘による名物番組だね」

熱く語るカイを遠目に、冷静なリンとユイ。

ラジオ“かしまし娘三人衆”は、汝くんの小説ネタ。気になつたなら、GREENに行け。毎度お世話になつてます。（笑）

「カイ、亡命した後も聞いてたんだね」  
「らしいな」

右京さん。神奈川は今日も喧しいです。

いけいけ、僕らのナギちゃん（後書き）

ナギ、この時点でレギュラー決定（笑）

## ザルツの憂鬱（前書き）

ザルツ・クロノス。彼女は、まだいない。

## ザルツの憂鬱

その日、ザルツは突如叫んだ。

「リア充爆発しろ」

と。

\*

作戦会議室。ザルツは一つの書類を睨んでいた。  
神奈川の占領状況、防衛数、襲撃数…数字は全て、思わしくない。  
溜め息を吐き、椅子にもたれかかる。

「ザルツお兄ちゃん、乙」

「セイラ、乙なんてどこで覚えてきた」

「隊長のアカリお姉ちゃんがいつてた」

まだ幼いセイラには、アカリは悪影響だ。そう思つたザルツ。  
襲撃の改善点を纏める。

「来るなああ、カグラあああ！！」

「待つてよケンタきゅーん」

突然の声に、机につんのめるザルツ。

どうやら、カグラがケンタを追いかけているようだ。

「セイラ、おいで」

「なあに、ザルツお兄ちゃん…ふきゅ？」

ザルツはセイラを呼び、そつとセイラの耳を塞いだ。直後、

「捕まえた さあケンタ、覚悟してねん 」  
「ぎいやあああ！…や め ろおお ！…」

ケンタの断末魔の叫び声。遠くでパタンと閉まるドアの音。辺りに静寂が戻った。

ケンタの身に、何が起きたかは想像に任せる。

「本当、教育に悪いぜ…」  
「ザルツお兄ちゃん、お耳あつたか～い」

いくらHQ200を誇るセイラといえど、まだ幼い子供。リアクションが可愛い。

頭を撫でて、暫し和む。

「リン、買い出しに行かないか？」  
「いえ、ボクと行きましょう」「う」  
「リンくーん。買い物、私とこいっ！」

今度は何だ。

カイとユイ。そして…確かに最近埼玉から亡命してきたカズマというヤツが、毎度お馴染みリン争奪戦をし始めた。

「お前らなあ、買い出しなら一人で行ける」  
「ダメだ。リンを一人で行かせる訳にはいかない」  
「そうです。可憐な貴女を危険な場所に行かせる訳にはいきません」  
「…」

「リンくん、こんなムサイ奴らなんかほつといて行こうよ。」

「ムサイ…だと…？」

「聞き捨てなりませんね、お嬢ちゃん」

「おじょ…！！」

壯絶なる口喧嘩勃発。セイラがオロオロしている。

ブツンッ

ザルツの中で、何かが切れる音がした。

机を蹴り、四人の元へ行くと、コイ、カイ、カズマを次々と殴り、叫んだ。

「やつかましーわー！三人で一人の女取り合つてんじゃねえー！ア充爆発しろー！」

この場でただ一人、その言葉の意味を知るリンは思った。

ザルツさん、微妙に日本語、間違えています。

## ザルツの憂鬱（後書き）

電子の海でリア充も何もない（笑）

## 沖縄遠征へ…（前書き）

九州、沖縄奪還イベントです

## 沖縄遠征へ…

沖縄。

そこは、戦場だった。

\*

九州・沖縄地方が外国勢に占拠された。  
サクラの指示の基、三国は九州・沖縄地方の奪還へと向かう。  
遊軍も例外ではなく、メールにてザルツより「現地行け」との命令  
が来た。

リンとユイは遠征の荷物を纏め始める。

「リンくん、何で九州じゃなくて沖縄行きを選んだの？」

「九州には優秀な知り合いが三人もいる。沖縄は、…タツが心配だ  
から」

「タツ？」

「従兄弟。俺と同じ水泳使い」

鞄に一通り荷物を詰め、リンは携帯の写真を見せた。

写真には、男だった時のリン、その隣に長い髪を縛った青年がいる。  
どうやら、青年がタツらしい。なかなか爽やかなイケメンだ。

「うひょー、沖縄イケメン！ テラ萌えゆす」

「会いたい？ 沖縄と一緒に来る？」

「リン様、お供します！」

ユイのテンションが少々おかしいが、一人はいざ沖縄へ…！

一方その頃。

その話を（壁に耳当てて）聞いていたカイとカズマは、険しい表情をしていた。

「いきなり激戦地を選ぶとは…リン、やるな」

「流石ですね」

「それよりも…」

「ええ」

「「新たなライバルの気配が」」

：仲良いですね、この二人。（笑）

そんなこんなで、カイとカズマも沖縄を口指す。

「ツクツクさん…今度こそ、貴女を守ります…」

カズマは胸元のペンダントを握り締め、ぽつりと呟いた。

沖縄遠征へ…（後書き）

タツはモバゲーでお世話になつてゐる方がモーテル（笑）

## 激戦区（前書き）

沖縄の資料が無かつた＼（^○^）／

失う怖さを知つてゐる。  
だからこそ、貴女を守りたい

\*

沖縄。今其処は激戦地だった。

現地の能力者たちは、首里城を最後の砦とし、籠城を余儀なくされてゐた。

一人の青年が、塀の上の少年に声をかける。

「ナバリ、どうだ?」

「そうつすね。敵兵の数：60ちょいって所。タツ、どうすつさ?」

「カガミさんにその事を伝える。ここを見張りは、俺がやる」

「はいや」

ナバリという名の少年は、随分と身軽なようで、素早く塀から降りた。

タツは、近くの木に登り、遠方を見遣る。

敵の動く気配は、無い。

(籠城作戦の弱点は、時間の経過だ…)

タツは、懐に忍ばせたトカレフに触れる。

この時点で、沖縄の能力者の大半が戦闘不能に陥つてゐる。

「リン…元気かな」

ボンヤリとしながら、タツは従兄弟の名を呟く。

その時だった。

「敵襲――――ツ！裏から第一陣が突破してきた！・総員、戦闘態勢！」

「何つ！？」

まさかの敵襲。田の前の敵は、動いていない。

オトリか！

「ちつ……トモコ、ジンナ、ヒョウカはカガミさんを守れ！・ナバリ、ソウヘイは俺と来い！……

「オッス！」

声高らかに、迅速な命令を出すタツ。木から飛び降り、近場のバルを手に走り始めた。

銃声と破壊音。塀が破壊されていく。タツと仲間たちは、兵士たちをなぎ倒していくが、キリが無い。

敵の総攻撃に遭うのも、時間の問題かもしれない。

「タツわま」

本陣から、一人の女性が出てくる。タツは驚いた。

「カガミさん、出てきてはダメです！」「いえ、私も戦います」

カガミと呼ばれた女性は、タツの静止を振り切り、薙刀を手に敵陣へと切り込む。

「くそつ、全員、カガミさんを守れ！」

タツと仲間たちも、敵陣へと走る。

だが多勢に無勢。何人かの仲間が既に倒れた。

タツ達は完全に取り囲まれた。

「カガミさん」

「タツやま、降伏…しましょ…」

「なつ…！カガミさん！？」

「これ以上の犠牲は…」

「降伏はさせませんよ…」

どこからか、声。敵軍も、タツ達も辺りを見渡す。直後、吹き荒れるダイヤモンドダスト。

「」の気配、まさか…

「沖縄の同志よ、助太刀しましょ…」

激戦区（後書き）

グダグダやんけ

## 狩りの時（前書き）

狩りじゃああ……は、口癖です

## 狩りの時

「」の力、我らが指導者の為に

誓て立てた誓いを胸に、俺は闘い続ける

\*

タツ達の前に、颯爽と数名の男女が現れた。数は、6～7名。

「…傭兵団は、各自命令通り。死神団は数を減らせ」

黒いフードを被つた人物が、冷静な指示を出す。直後、全員が敵に向かって走り始めた。

数人、「狩りだ、血祭りじやあああ」と叫んでいる。明らかに、ヤバい。

「ユイ、来てくれるかい？」

「うん。勿論よ、リンくん」

一人は、走りながら、お揃いの「ラッシュベリーランスを取り出す。

「まずは15人！」

「20人、撃破ああ…！」

「… 13」

「よし、7です」

「25人目待てや …！」

「撃破数、31人突破！」

敵陣のド真ん中、各自が人数を数えているらしい。そこまで余裕のようだ。

リンとユイの、槍の一閃。多くの兵が一撃でなぎ倒された。

「一撃で53つて所か」

「私は67かな」

「何い！？」

しかも生き生きしてやがる。

その様子を見ていたタツ達は、暫く啞然としていたが、

「… つ！…本土の奴らに任せつ放しにするな…俺達も闘うぞ！」

タツが激を飛ばす。

だが、その時既に、敵の数は疎ら。撤退し始めていた。

「リンさん、バカが逃げてくよ？」

「深追いするな」

「狩り足りん」

「我慢」

「……リン？」

タツはフードを被つた人物に話しかける。相手も気付き、振り返った。

その姿は、全く別の人物。だが、魂はリンである事を、タツの《眼

『 は見極めた。』

「 その声は、タツ？」

「 リン、久しぶり。イメチョンしたか？」

「 まあ、色々ありますね」

「 「 おい！」 もっと他に突っ込む所があるだろ！ ！」 』

リンを知る人物たちは、全員でツツコミを入れた。

狩りの時（後書き）

元気やなあコイシ

カケラは九州へ（前書き）

多分、リンより壊れてる。

## カグラは九州へ

青き空の下、少女は笑っていた。

\*

九州は熊本。カグラは、高いビルの屋上から地上を見下ろしていた。

「敵は…統率力さえ薄れてきたか」

カグラの短い髪が、風に揺れる。  
ふと背後から、殺氣を感じた。

敵軍だろう。屋上の出入口に…3人。

(チッ…舐められたもんだぜ)

カグラは髪を搔き上げた。

昔から、苛ついた時にする癖だった。  
ふわりと、足元で風が渦を巻く。

「お兄さん達、バレバレだよ?」

切り裂け!!

風の刃が殺到する。断末魔の叫び声が響き、すぐに静かになった。

「フンツ、素人共が」

カグラは再び下を見る。

九州に来て、何人殺めただろうか。

リン達と違い、カグラは手加減が出来ない。東京での闘いの時も、何人も殺めた。

罪悪感は…無い。

「制御出来ない力ほど、質の悪いものはない、かあ」

屋上の出入り口に向かう。靴に、血が跳ね返った。  
薄暗い踊場は、血の海だった。

「…クソツ」

これは現実だ。ムカつく位生々しい、死の現実。  
怖い？そんな感情、とっくに壊れたさ。  
不意に、携帯が鳴る。電話に出ると、

『カグラ、今どこだ』

ザルツだった。

「ザルツ隊長ー：カグラ、寂しいよー」

『切つていいか』

「嘘です、ゴメンナサイ」『熊本の戦況はどうだ』  
「疎らになつてきたよ？そろそろ一掃出来そう』

自分が薙ぎ倒した死体を踏みつけ、明るい声で答えるカグラ。そのまま瞳は、笑っていない。

『そりが…。カグラ、神奈川に戻つたら…』

「ん？」

『な、なんでもない！必ず無事に帰還しろ…以上だ』

ブツンと通話が切れる。

カグラは、キヨトンとした表情で血の海に立ち廻ぐ。

「何慌ててんだ、アイツ」

携帯をしまい、薄暗いビルを進む。

ここに人の気配は、もつない。

カグラは九州へ（後書き）

ザルツ、マジビうした

【番外編】夏の暑さにてられて（前書き）

これ書いた時が、丁度真夏日でした。

## 【番外編】夏の暑さにあてられて

只今、東京30越え。  
リンは些か参つていた。

元々、気候の涼しい山育ちの為か、暑さに滅法弱い。しかも水泳使  
いだから尚更堪える。

「…」

「リンくん、無理しないで」  
「ユイはいいな、暑さに強くて」  
「爆炎ですか」  
「あつそ…」

日陰を見つけ、ぐつたりとなるリン。  
涼しい風が吹く。  
微動だにしない。

「リンくん？」

「…よし、施設に帰らう」  
「早っ」

…施設へ帰還…

「アイス配布ー」

総隊長のアカリが段ボールいっぱいにアイスを持ってきた。  
集る人々。

この時期、アイスの需要は上がりやすい。リンとユイもアイスの恩恵に肖る。

「あれ？ カグラちゃんは？」「うう時、真っ先に来るの」「何でも『喧嘩と暑さは気合いだああー！』と叫びながら部屋で座禅組んでるみたいです」

カグラの座禅を想像して、リンは思わず吹いた。ザルツは呆れ気味。「…あとで誰か部屋見て來い。熱中症で倒れてるかもしけんぞ」「オレは嫌つすよ？ カグラに襲われる」「この前、カグラと一線越えたんだろ？ なら問題無い…」「勘違いを生む発言しないでくれーーー！」  
「違うのか。では、俺が見にいく」

そういうてザルツは棒アイスを手に、カグラの部屋へと行く。全員が不思議なものを見る目で、ザルツを見送った。

「なあ、まさかだとは思つが…」「どうしたの、カイ」「ザルツ隊長、カグラ狙いでは」「…まさかあ」

怖い事を仰る。

数分後、カグラをザルツが連れてきた。熱で混乱してゐるのか、叫ぶカグラ。

「漢たるもの、気合いだあああー！ 行くぜ、ドラゴンダアアイ！」  
「死にたいのか馬鹿者！ それにお前は女だろーーー！ リン、永くれ」「はい」

ザルツは一発カグラを殴り、氷入りの袋を頭に乗せた。暫く放置。

「暑いね、色々と」

「うん」

リンとユイは、ザルツを見ながら呟いた。  
夏つて、怖い。

【番外編】夏の暑さにあてられて（後書き）

ザルツ×カグラなのが、カグラ×ザルツなのが解らない（笑）

## 言葉使い（前書き）

実は断罪の死神＆遊軍の合図部隊だった事実（笑）

みんなを守る。  
それが貴方への  
唯一の手向けとなる。

\*

敵軍の一時撤退。そして本土の援軍。最前線の戦地は今、緊張感を通り越しておかしな事になっていた。

「カガミ姉さん、お久しぶりです」  
「その魂は…リンですね。フフッ、姿は変われど我々には解りますよ」  
「恐縮です」

沖縄の年長者たちは、口々にリンを敬う。その異様な光景に、チムもビックリ。

「ちょ、魂とか何！？一発でリンを見分けるとか常人技じゃないよ？」

「沖縄特有の感つてやつ？」

「野生の感？」

「…静かになさい」

カガミの澄んだ声に、本土勢どじろか沖縄組まで黙る。

「相変わらず、音の能力すごいね」

「いえ、水城の者の力に比べれば、私達“各務”は足元に及びません」

カガミはそういうと、微笑んだ。直後、ガクリと力が抜けたようにカガミは崩れ落ちる。タツが素早く支えた。

「カガミさん！？」

「…大丈夫、意識を失つただけだ」

タツはカガミを抱き上げる。

その光景は正に、美しき眠り姫を抱き上げる、異国の王子の図。そこだけ次元が違う。

「うひゃー、絵になるわあ…」

思わず、ユイが呟く。

一部女子、うつとりと溜め息。自分がやつてもらつてゐのを想像したらしい。

ふと、誰かの携帯が鳴つた。

何故か、深夜アニメで有名な「マジカル マヤちゃん」。つまりアニメン。

全員が音の主を探す。物好きは、オタクは誰だ！！

「…あ、俺のだ」

「「ザルツさあああん！？」」

犯人、ザルツ・クロノス。

電話に出て、暫く話すと、ガツツポーズを取るザルツ。

「全員聞け！吉報だ。右京さんたちが敵の本拠地を占拠した！――！」

「それってつまり……」

「俺達も遅れを取るな！――今より、敵残党を始末する――！」

その場の全員が、歓声を上げる。そんな中、リンは倒れたカガミが氣掛かりでならなかつた。

……ザルツ、いたんだ。

## 銀の星（前書き）

タツは明らかにフレン（テイルズオブのキャラ）と同じ属性。

銀の星。

貴方は私をそう呼んだ。

\*

残党の討伐は、案外呆氣なく終わってしまった。

右京率いる精銳部隊は、敵陣本営を壊滅させ、リーダーを仕留めた後、すぐに神奈川に帰つていったといつ。

その時現場に居合わせた仲間曰わく、手柄を取られたえみるの悔しがり様は、録画ものだつたとか。ザルツが仲間全員に声をかける。

「みんな、よくやつた。神奈川国の勝利だ」

「あのーザルツさん、俺たちもすぐ神奈川に帰るの?」

「いや、2日は休養だ」

「いやつほーい!隊長、俺海入りたい!!」

「アタシは「ゴーヤ食べたい!」

「つか、ザルツさーん。観光したいでーす」「好きにしろ」

その一言で、全員一瞬で解散。

リン、ユイ、ザルツの三名と沖縄民だけが残された。

「凄いわね。正に沖縄に飢えてるつて感じ?」

「ユイは行かないのかい?」

「私？私はいいわよ」

「ザルツさん、サーティアンダギー食べる？」

「何故そこでオレに話を振る！？」

神奈川国民、沖縄にて暫しのバカنس。

\*

一方その頃。

目覚めたカガミは、寄り添うタツの手を優しく握り締めた。

「タツさま…」

「…あ、カガミさん。目を覚ましたか

「ええ」

ふわりと微笑むカガミ。体を起こし、真っ直ぐにタツを見、

「タツさま、私…一線を退こうと思います」

「え」

「この力も、もう限界が近いです。それに、私を守りながら戦うのは、辛いでしょう？」

「いえ、そんな事は…！」

タツの否定の言葉を、カガミは自らの唇で塞ぎ、すぐ離した。たつた数秒の事だったが、タツは別の意味で固まってしまった。

「もう、誰かの命令で私を守り、誰かが傷つくのを見たくありません

ん

「カガミ…さん」

「最後まで我が儘で、ごめんなさい」

「…いえ、そのお願ひだけは聞けません」

「……え」

冷静なタツの声。カガミの手を握り、真っ直ぐに見据えた。

「俺が守りたいから、守っているだけです。誰の命令でもない。俺自身の意志です」

「タツ…さま」

「カガミさん」

「こんな我が儘な私でも…いいの？」

「ええ」

「…分かりました。私、もう少しだけ、頑張ります」

タツは、そつとカガミを抱き寄せる。カガミの瞳から、一粒の涙が零れ落ちた。

そんな一部始終を、偶然見ていたリンは、静かに扉を閉める。  
そして一言。

「うおえ、甘つー。」

「もつともです。（笑）

胸焼け。（笑）

そして新たな闘いへ（前書き）

沖縄奪還が終わり、作者が執筆に取りかかった頃、中国地方が侵略された（笑）

そして新たな闘いへ

世界を君に…

\*

楽しい3日沖縄バカンスも終わり、リン達は神奈川へ帰る事となつた。（1日延長した）

「やついたら、カイとカズマ、最後まで来なかつたね」

「やついたら、お陰でリンくんを独り占め出来たけど」

リンとコイは不思議そつに辺りを見渡す。

「電話してみようか」

「うん」

試しにかけてみる。二回の「ホールの後、出た。

「あ、カイ？」

『リン、助けてくれ…』

カイの掠れた声。リンは、ただならぬ気配を感じた。

「カイ、今どこだー？」

『中国地方の…………』

「中国地方の何処だ？…カイ？カイ！…おい、返事しろ……」

そこで通話は途切れた。

嫌な予感がする。

「リン、どうした」

「カイに、何があつたらしい…中国地方に、いるみたい」

携帯を握り締めるリン。

ザルツは、素早く自分の携帯を取り出しメールを送る。

「動ける奴ら全員に中国地方に向かうよ」メールした。リン、俺たちも行くぞ！…！」

「は、はい！…！」

「リンさま」

移動用にチャーターしたヘリへ向かおうとするリンに、カガミが近付く。

リンの首に、青い硝子のペンダントをかけた。

「カガミ姉さん」

「琉球硝子の御守りです。貴方に、海神さまの加護を」

「ありがとうございます」

「リン、急げ！…」

「みんな、ありがとうございます。今度は遊びに来るから……またな……」

リンが乗り直ぐに飛び立つヘリ。飛び去るヘリを見送り手を振る力ガミたち。

「また、お会いしましょ」

青く澄んだ空に、カガミは呟いた。

そして新たな闘いへ（後書き）

作者も慌てて向かいました（笑）

## 戦場・三口国（前書き）

ゲスト出演として、チーム断罪のメンバー。

新たな死神、現る。

\*

弾丸の残り、あと16発。

カズマは、手持ちのリボルバーから空薬莢を取り出し、新たに装填し直す。

その横で、カイは日本刀に付いた血を拭っていた。  
リンを追いかけ、沖縄に行こうとしていた二人は、どういう訳か、  
山口にいた。  
つか、この二人、凄まじい方向音痴で迷子になつたのだ。  
そこに外国勢の奇襲攻撃。運は、良い訳がない。

「ツクヨ…リンさん、来ますかね」

「来るに100プラッド」

「凄い自信ですね」

「奴らが来た、静かにしろ」

「……」

二人は武器を構える。足音が聞こえる。

数は…7人程。

一人を除いて、能力は低めだ。一番強いのは、隊長だらう。

「どうする」

「こちらから仕掛ける」

「解りました」

決断すると、二人は即座に行動に出た。カイが斬り込み、カズマが援護射撃をする。

「K i l l h i m ! !

「黙りなさい ! !

銃声。そして雷が轟く。カイが振り向いた。

「…お前、迅雷の能力だったのか」

「ええ、一応

隊長を残し、手下を一掃する二人。

カイが日本刀を構え、隊長めがけて走る。だが、

「…ぐあつ！」

予想以上の力の差に、カイが遠方に吹っ飛ぶ。それに巻き込まれたカズマは、頭でも打つたのだろうか、気絶してしまった。

「お、おい、カズマ…」

「G o o d b y e . J a p a n e s e b o y

鈍器が振り下ろされる。カイはカズマを庇い、左腕でその一撃を受けた。

「…………つー！」

骨が折れた。激痛に意識が飛びそうになるのを堪える。

次の一撃は……防げない。

「ハロー」

突如、場違いな明るい声が響いた。

隊長の遠方、二人の少年少女が手を振っていた。刹那、隊長の背後に回った少年が、脇腹に回し蹴りを食らわせる。次に少女が走った。右足を軸に、体を捻り、遠心力で手に持ったバーを力一杯ぶつける。

鈍い音がした。

「吹つ飛べーーー！」

遠心力か、はたまた少女の腕力か。隊長は吹つ飛び、動かなくなつた。

「貴方たちが、カイとカズマだね？」

少年が問う。

カイは何もいわず頷いた。

少年と少女は微笑み、頭を下げて自己紹介。

「初めてまして。リンさんからの依頼で来ました“断罪の死神”のセ

ーマです」

「同じくキョウでーす！」

なんか、とんでもないのが来た。  
カイは一瞬そう思った。



**戦場・三河國（後醍醐）**

いの皿皿のひの  
のヒース達です

よつやるわ。（笑）

## 気儘な死神

楽しけりやいい。

そうして僕らは集つた。

\*

断罪の死神と名乗ったセーマとキヨウは、カイとカズマを素早く手当でした。

その迅速さは医務班並みである。

「君達は、リンの知り合いなのか？」

「うんっ。あ、セーマ君、リンさんに対象一人を保護したつて連絡した？」

「抜かり無しだよ」

「さすがあ！」

カズマも漸く意識を取り戻し、起き上がる。少し顔色が悪い。心配したカイが声をかけた。

「カズマ、大丈夫か？」

「カイさんつて…」

「？」

「最近太りました？」

「…つ…！」

図星らしい。かなりヘコむカイ。そこに…

「カイ、無事か？」

な、な、な、な、な、ナギさまあああああーー！」

ナギの登場で、一気にテンション上がるカイ。単純です。

「ナギちゃんお帰りー。あつちはどうだった？」

「うん、軽く1000人近くボコボコにしてきた。あ、これ差し入

九

# 大きなお弁当箱。 キウイの目が輝く。

「ナイスナギちゃんー。やつぱりピクーークにはお弁当だよねーー！」

「え、ピケー、ツケ……？」

「贊成！」

「ああ、それで、アーティストをやめるアーティスト。」

ナギ、キミウ、セーラマはちやつかり座り、お弁当箱を開け始める。さすがに啞然とするカイとカズマ。

「おまつり事典」――「おは戦場」

「堅いこというなつて。はい、カズマ君にはオニギリ」

「カズマ訓染じな!!」

「カイ君は、オーラギリいらぬの」「

「...」る」

着席。戦場のど真ん中で黙々と食べる5人。

襲撃されないのかつて？そのアナタ、…彼らに襲撃が出来ますか

? (笑)

こつして、彼らの顔は静かに過ぎていった。

氣儘な死神（後書き）

遠征はピクニックです

ザルツの憂鬱2（前書き）

ザルツ病（笑）

## ザルツの憂鬱 2

解らない。

理解出来ない。

どうした、オレ！！

\*

移動の飛行機の中、何度も目を溜め息だらうか。  
ザルツが窓の外みて、溜め息連発してます。

「ザルツ、どうしたんだ？」

リンが首を傾げる。心配そうにセイラがザルツの服を引っ張った。

「ザルツお兄ちゃん」

「ん？ ああ、どうしたセイラ」

「どうしたの？ 何か心配？」

「いや… カグラの事なんだが」

カグラという単語に、全員の顔色が変わった。

「か、カグラお姉ちゃんが、どうしたの？」

「最近、アイツの事を考えると体調が悪くなる

「どんなふうに」

全員が会話をやめ、聞き耳を立てた。リン、その状況にちょっと引

く。

ザルツは、ぽんやりとしながら語り始めた。

「いや、アイツと話すと、脈拍が早くなるし、頭はボーッとするし、息苦しくなる。たまにだが、クラクラしたりするんだ」

診断結果。恋じゃねえか。

セイラは微笑み、そつとポシェットから何かを取り出した。

「はい、ザルツお兄ちゃん」「なんだコレは」「動悸、息切れには、救心だよ」「ありがとう、セイラ。そつか、病氣か…」「そう、病氣だよ」

そうじつて渡すセイラの手は、笑つてない。セイラから立ち上るオーラは、いうなれば、そこいらの馬の骨などに、お兄ちゃんは渡さねーぞ、ゴルアである。

異質な空氣に、リンは苦笑した。

「何なんだ、あれは」「ザルツも大変ね…」

ザルツもリンも、恋を理解するのはまだまだ先のようである。

早く助けにいけや、おまこいら

せつせと響ひづり（前書き）

最大のミスに気付き、慌てて訂正。（笑）

どこからか、えみるさまの高笑いが聞こえた。

\*

リン達が現地に着いた時、戦場のど真ん中で、弁当を食つゝ異質な集団がいた。

無論、奴らである。

「リン、アイツら本当に弁当食つてるぜ……」

「いいのでは？みんなー、助けに来たよー？」

「「リン（せん）ーー！」

5人がハモつた。

ザルツは、医療班にカイとカズマを任せ、おにぎり一個強奪。その直後である。携帯から、メールを知らせる着メロが流れた。  
無論、ザルツはマジカル（マヤちゃんの着メロ）

「千葉が頭の首取つたって」

「マジかよ。到着遅れたのが響いてるな

「え？ピクニック終わり？」

「狩り足りない」「いやつふーい！」

とこつわけで、遠征終了。お疲れ様でした。

わたりと歸れり（後書き）

千葉の指導者がえみるちやん

コソヒ論証のひやつの母聞（前編）

俺は甘味鬱です（キーリッ

## リンと愉快なおやつの時間

知ってる?

糖質をとり過ぎると

鬱になるんだよ? ブソムク

\*

港区。遠征から帰還し、ザルツにパシリにされているリン、ケンタ、セイラの三人は、偶然にもムクと出会った。

「あ、ムクお兄ちゃんだ」

「本当だ」

「おーい、リョウタロウ」

「え?」

読者諸君。先に言つておいた。ムクの本名はリョウタロウである。

(笑)

ムクはいわばニックネームである。

それはさておき…

「また甘いの食つてんのか」

「うん。サクラさんがまたくれたんだ」

そういうながら、美味しそうにチーズケーキを頬張るムク。幸せそうである。

またサクラの、気紛れ甘味振りまきイベントが来たのである。

セイラが、リンの服の袖を引っ張る。

「リンちゃん、セイラも甘いの食べたい」

「じゃあサクラ探すか」

探索数分。廃墟の近くでかき氷を作るサクラに出合った。

「おや、アンタ達いい所に来たね。かき氷、食べるかい？」  
「な、何故かき氷…」

ケンタがツツ「ミ入れる横、笑顔で手を出すリンとセイラ。リン、実は無類のアイス好きなのである。

「「わ～い！～」」

子供が一人に増えました（笑）

「あれ？ サクラつち、オレには？」

ケンタが手を差し出す。

サクラは微笑んだ。

「すまないねえ、氷菓子はあの2つで終わりなんだ。代わりといつちや何だけど、これをお食べ」

さあ両手を。サクラに促され両手を出すケンタ。  
ザラザラーっと飴が渡される。

「飴ちやんだよ。大体20粒くらいかなえ」

「こんなに食えません！！」

右京さん、今年も夏は暑いです。

コソと愉快なおやつの時間（後書き）

ストック30個が全て飴で埋まつた作者。悪意しか感じられん。

彼女（？）が浴衣に着替えたる…（前書き）

定番といや定番。

彼女（？）が浴衣に着替えた…

小物一つで  
女性って変わるのよん？

ｂｙキヨウ

\*

サクラの菓子配布が終わり、リンたちは貰つた浴衣を着る事にした。

「浴衣なんて、着方知らんぞ」

それが引き金だった。猛スピードで女性陣に連れ去られるリン。それを見ていたカイ、カズマ、ケンタの三名。

「着替え…だと？」

「しかも、浴衣やて？」

「…カイさん、ケンタさん、もしや…」

「漢たるもの、やる事は一つ…」

そういうと、廊下に這いつくばり、匍匐前進を始めるカイとケンタ。頭が痛い。カズマは一人の上着の裾を掴む。

「はい、止めましょ…うね」

「止めるなカズマ！これは重要なミッションだ！」

「離せ！お前ツクヨミちゃんの、汚れ無き白い肌見たくないんか！」

？

「カイさん、そんなミッション破棄なさい！」というかケンタさん、言い方がヤラシイです！貴方達、色々な意味で指名手配になりますよ……」

「構つかーお前のツクミちゃんのナイスバディ、女子のみ拝ますなぞ、勿体無い……」

「そりやそりや……」

「覗かせろー！枯れススキめ……」

「離せ！このリア充め……」

「何してるの？」

そこに現れたセーマとナギ。

「聞いて下さいよー！」の一人が女子更衣室を覗くつと……」

「ふーん」

「そりなんだ」

直後、セーマとナギの目の色が変わる。どこからか、スコップを出し……

「リンさんたちからの依頼でして」

「覗くつとする者を断罪せよ。だって……」ゴメンね

バコスカバコスカ……

「カズマ君、協力感謝です！」

「は、はあ……」

「断罪つて楽しいね」

そういうて見張りに戻るセーマとナギ。  
カイとケンタは、リンたちの浴衣姿を見れたかつて？

：んなわけないじゃん（笑）

彼女（？）が浴衣に着替えたる……（後書き）

この頃から、カイがいろんな方向に壊れ始めたんだよな……（遠い目）

混沌極まりない

## 「Jリーグ」であえてチーム断罪の紹介

作者（以下・燐道）「んじゃま、断罪の死神の方々、自己紹介いつてみようか。」

水城凜<sup>リン</sup>「え、俺必要？主人公なのに」

火乃結<sup>ユイ</sup>「ヒロインなのに」

燐道「ええからせれ」

リン「えー、この小説の主人公です。水城家の末っ子で、趣味は23区戦況アナライズ。」

ユイ「あれ、趣味だつたんだ…。おほん、私はこの小説のヒロインです！！断罪の死神の初期メンバーです」

燐道「そういうやそやね。古株はキヨウちゃん、ナギちゃん、ユイさんら辺だな。初期メンバーの大半は戦死してるか亡命しちゃったしね」

リン「…どんだけだよ」

相良凪<sup>ナギ</sup>「ねえ、僕も自己紹介していい？」

燐道「うん」

ナギ「D」ナギだよ。軍に全く興味無いのに断罪の死神に参加してます（キリッ）

燐道「キリッじゃねえ！！お前は毎回作戦前に体力使い果たしやがつて、指揮する身にもなれ！！！」

市恵雅樹「本当にナ（キリッ）。あ、俺はマサキ。特技はマジック。宜しく」

燐道「おまえも同罪じゃ！！昨日（12/17の事）二人で行動力を風前の灯火してやがつて」

ナギ＆マサキ「発作だからじょうがない！！」

燐道「お前らあああ…少しあ反省し！」

柳沢静麻「まあまあ、燐道さん落ち着いて！！あ、僕はセーマ。漢字読みは“しづま”が正解だよ」

土岐夾<sup>キヨウ</sup>「そりだお。落ち着くのうトウシットウル（ ）」

燐道「うつ、エースアタッカー一人に止められりや…。解った。つか、止めなきゃ俺が殺される」

来栖東美<sup>トウミ</sup>「賢明な判断ね。では自己紹介よ。私はトウミ。裏では遊軍直下の傭兵部隊を指揮してるわ。因みに、男も女もウェルカムよ

「…」

燐道「変な事いうのやめれええ！！」

ユイ「…ちょっと。何でケンタまでいるのよ」

迦具土健太「一応、断罪の死神らしいねん。趣味はリンの寝顔鑑賞」

ユイ「消し炭になれええ！！」

李春蘭<sup>スモモ</sup>「そういうワタシは断罪を辞めたのはビミシネ。ワタシ、スマモ。特技はシャチョさんとイチャコラ（ヽヽヽ）」

碓氷天城<sup>アマギ</sup>「……アマギだ。以上」

燐道「お前ら、もう少し真面目に……」

ユイ「てか、ヒヒヒビヒッ！」

リン「会議室だああああーー！」

マサキ「どうして現場に血が流れるんだ！」

リン「人がいるからだああああーー！」

ナギ「帰つていい？」

リン＆燐道「勝手に帰れええーー！」

以上、自己紹介になつてない自己紹介でした（笑）

こんな濃いやつらです

実在したプレイヤー

## Mの悲劇

それは、まさに

…恐怖。

\*

ここ数日の事である。リンの携帯に、亡命者田撃のメールが頻繁に届くようになったのは。

「またアЙツか…」

しかも同じ人間が1日に何度も亡命している。明らかにおかしい。

「…また奴が。断罪していくか」

「何で亡命ばっかりするかねえ」

「葡萄酒やつはー」

そうこうで、トウミ、マサキ、スマモの死神傭兵御三家（笑）が出撃していく。

リンとセーマは考えていた。

亡命の時間、レベル…総合して出た結論は

「…いひ、まさか他国情報収集してる…？」

「要注意人物に指定しましょう」

今思えば、警戒のし過ぎだったのかもしれない。

そして数日後、中野区。ヤツが自國の人間としているのをセーマが見つけた。

「生け捕りにして尋問するぞ」

「はい」

リンとセーマはスコップを持ち、中野区へ向かつ。ヤツは、死神傭兵御三家に取り囲まれていた。顔や腕は傷だらけで、見てて痛々しい。

「…今から交渉する。武器を下ろせ」

リンは前に出た。ヤツは頭を伏せたままひき見よつともしない。

「何故、亡命ばかりするの?」

「は……を……」

「え?」

「薄情な私を断罪して…」

何だろ? その言葉に一瞬鳥肌が立つたのは。ヤツは頬を赤らめ、叫んだ。

「薄情な私を断罪して下下さい! - ハアハア (\* 、 、 )」

スコップが音をたてて落ちた。

恐怖が殺意を上回った瞬間である。

ヤツに…これ以上関わってはいけナイ。

「そ、総員待避いいいーーー！」

我にかえつたリンが叫んだ。  
全員、一斉に逃げ出した。

「だ、断罪してえーーー！」

「誰か断罪してやれよ

「イヤだー、絶対イヤだああーーー！」

セーマ、まさかの拒否。

全員がヤツを撒いて拠点に帰る頃には、夕方になっていた。

それ以降、ヤツ（通称ダシ工）は要注意危険人物に指定され、亡命しても放置プレイを展開されたのは、言つまでもない…。

監視に置いたのは怖いから

## 第一次東京大戦～チーム断罪～Sポイズンピンク～（前書き）

トウミちゃんがモーテルのプレイヤーは目の鋭いイケメンです（笑）

## 第一次東京大戦～チーム断罪VSポイズンピンク～

奴らは再びやつてきた…

\*

北区連合。リン率いるチーム断罪の前に、奴は現れた。  
毒で敵を蝕む女、ポイズンピンク。

「「さいしょはグー、じゃんけんぽい！！」」

何故か、じゃんけんし始めるリン達。  
勝つたのは、トウミ。

「よし。行け、トウミちゃん！…」  
「フフフ…」

長く艶やかな黒髪をなびかせ、トウミは前へ出る。  
ポイズンピンクに、妖艶に微笑むその眼は、笑っていない。

「私の相手はあなた一人？」  
「一人で充分よ」

真紅のルージュに彩られた唇が、つり上がる。

「…お子様達は下がつてなさい。ここからは、大人の時間よ…？」

「トウミちゃん、本気だね」

「じゃあ後ろ向いておひつか」

「賛成賛成」

「ナギちゃん、イヤホン貸して」

「ヤダ」

何故かトウミを除いた全員が後ろを向き、耳を塞ぐ。

トウミが何かを出し、着火。投げた。

それが火炎瓶だと氣付いた時には、辺りは火の海。逃げ場は、無い。

「な、なんなの！？」

「フフフ…逃がさないわよ…」

不気味な声に、ポイズンピンクが震ざめる。

そして、ポイズンピンク背後に回り込んだトウミの手が…

「いやああああああああ  
ツ…！」

「オ ホツホツホツ…！」

炎の中、ポイズンピンクの絶叫とトウミの高笑いが響く。

「トウミちゃん…おひつか」

「同感」

「教育に悪いですね」

トイズンピンクに何が起きたかは、この想像にお任せします（はあと）

ポイズンピンクVSチーム断罪  
勝者：トウミ

ほんと、なにがおきたのかな

## 第一次東京大戦～チーム断罪VSスカイラー・ラー～（前書き）

スモモ…お前はエースアタッカーだった（過去形）

## 第一次東京大戦～チーム断罪VSスカイラー～

北の地にて  
悪しき者を  
撃ち落とさん

本日のクエスト

\*

「やあ、また会ったね」

そういうて、スカイラー・ラー（以下・スカイ）はチーム断罪の前に現れた。

全員が怪訝そうな表情をする。

「うつわー、カオスKYだよ」

「本当にKYだね」

「サイテー」

「ぐつ……」

いきなり理不尽に罵られるスカイ。

リンは鞄から何本かの紐を出し、一本だけ先端を赤く塗った。

「さて、今回は誰が相手する？赤引いたらその人がKYを相手にするんだよ」

「はーい」

「な、何それ……」

スカイの反論を無視し、全員が一斉に紐を引く。  
赤く塗つた紐を引いたのは…

「ハイさ！スモモいくよーー！」

独特な訛りのあるスモモが、スカイの前に立つ。

「さて、今日はどこまで高く飛ばして…」

「黙れチャラ男！ー！」

カツキーン

右脇腹めがけた金属バッドの一撃は、スカイを天高くぶつ飛ばす。

「攻撃力3000、舐めんなボケエーーー！シャチヨサン、仕事終わ  
つたネーーー！」

スカイが帰つて来ない事から、多分どつかに墜落したんでしょう。  
案外馬鹿力でいらっしゃるスモモさんでした。

スカイルーラーVSチーム断罪

勝者、スモモ

第一次東京大戦～チーム断罪VSスカイルーラー（後書き）

ようやるわ

## 第一次東京大戦～チーム断罪VSステイールハート～（前書き）

セーマがモデルのプレイヤーさんは、モノホンの抜刀。 え

## 第一次東京大戦～チーム断罪VSステイールハート～

過去の因縁?  
そんなの忘れたさ…

\*

ステイールハートの出現。チーム断罪のメンバーがじやんけんを始める前に、スツとセーマが前に出た。刀の鞘に手を置き、抜刀の構えをとる。

「また会つたな。これで二度目か」  
「二度目の間違いじゃありませんか？」  
「…」

そういつた直後、セーマは抜刀。一陣の風の如し神速で、ステイールに斬りかかった。

ステイールも対抗する。

一撃目、白刃がステイールの顔を掠めた。ステイールも鋼鉄の拳を唸らせる。

何度目かの打ち合いの時、セーマの刀が遠方に弾かれた。

「しまった！」  
「その抜刀、やはりアサギ隊のセーマ」  
「…つ！」

明らかにセーマの顔色が変わった。

そして、

「アッシュクロード……」

渾身の一撃。ステイールは砂塵の激流に流された。セーマは飛ばされた刀を拾い上げ、鞘に収める。

「余計な事いってからアドメを刺せないんだよ。……砂塵の海に沈

むがいい……

「セーマくん……」

「乙……」

シリアスぶち壊すナギとマサキ。

刀を収めたセーマは、いつものように微笑んだ。

ステイールハートVSチーム断罪

勝者：セーマ

第一次東京大戦～チーム断罪VSステイールハート～（後書き）

それではセーマ君、演武、お願いします（ザシユツ

【番外編】最後の夢が終わる時…（前書き）

この作品を、旅立つた我が同朋、クルルへと捧げます。

## 【番外編】最後の夢が終わる時…

俺は、戦場で一人の少女と出逢った。  
それが、この物語の始まりである。

【最後の夢が終わる時… 110808】

その日、ケンタは杉並区にいた。  
とある廃墟に潜伏する千葉勢を叩く為である。  
然し、ケンタが乗り込んだ時、誰も居なかつた。否、少女が一人いた。  
青ざめた顔をケンタに向け、弱々しく微笑む。

「襲撃、デスか？」

「いや、そのつもりだつたんだけど…」

「構いませんヨ。私を、殺して下さい」

諦めているのか、目を閉じ、うなだれる少女。  
ケンタは少女に近付き、

そつと抱き上げる。

「…え」

「調子悪いんだろ」

そういつて、ケンタは少女を近場の診療所へ連れて行つた。

少女は病を患つていた。

病名は、医者にも解らないといつ。

ケンタは、その日から毎日、少女に会いに行つた。

だが日が経つにつれ、少女の病は進行し、1日中日を覚まさない日もあった。

「モウ…時間は無いかも知れマセンね」

少女は、死期を悟ったかのようにいう。それがいたたまれなくなつたケンタは、

8月7日、亡命を促した。

最期の時間を、共に過ごしたかったから。

少女は「良いですワ」と頷き、ケンタは少女を抱き上げた。

「携帯、貸して」

道の途中、ケンタは少女から携帯を借り、少女にチームメンバー申請を出した。

少女は動き辛くなつた左手で携帯を操作し、ケンタのアドレスを登録する。

「コレで神奈川民…デスね」

「うん。…澤田忍、いい名前だね」

「ありがとウ。あの…私、狙われ、マスかね」

「必ず、俺が守るから」

「…はい」

これが、少女・シノブの最期の笑顔だった。

8月8日。午前0時。

シノブは、ケンタの腕の中で静かに息を引き取つた。

きっと翌日には、チームメンバーの名前部分が空欄になつてしまつ

だろう。

だけど、俺は忘れないから。

君の名前を…

♪了♪

【番外編】最後の夢が終わる時…（後書き）

クルル。お前の名前は消えちまつたけど、俺は、覚えてるからな。  
俺が消えない限り、ずっとチムメンに、残しつく。  
必ず、どこかで会おう。

第一次東京大戦～チーム断罪～Sインヒジカルアサシン～（前書き）

マサキのプレイヤーさんは、三代目遊軍長（笑）

## 第一次東京大戦～チーム断罪VSインビジブルアサシン～

男は拳で語れ！！

\*

「…マタヤラレーキタ…」

姿の見えぬ敵、インビジブルアサシン（以下アサシン）。  
じゃんけんの結果、アサシンの相手はマサキに決まる。

「面倒だけど、やってくる」

「ククク

「相変わらずの笑い方だなあ」

そういうと、マサキはお得意のマジックでオレンジ色のボールを出した。

「？」

「はい、此方にはりますは、何の変哲もないオレンジ色のボール。  
だが、俺が一度魔法をかければ…」

1、2、3！

マサキのかけ声でボールが四つに増える。

そして、指を鳴らすとそれら全てが手から消えた。

「…ナニガシタイ」

## 「It's show time」

「ヤリと笑った。

途端、アサシンの頭上にボールが落下。ボールが割れ、中からオレンジ色の液体が噴出した。

「透明なんてフェアじゃねえだろ。俺も能力使わねえからガチで来いや」

「！」

「あ。あれって僕があげたペイントボールだ」

何故持ってる、ナギ。

そして、半ば青春ドラマばりの殴り合いの末、最後に立っていたのはマサキだった。

「…グ…」

「アサシンさんよ。お前もなかなか良いパンチだったが、こちとら場数踏んでるんだな。次会う時まで鍛えとくんだな」

そう爽やかにいうマサキの手には、いつの間にかバイク付きのメリケンサックが…

「マサキ、えげつねえ」

「ガチ勝負に武器とか（笑）」

「は？俺武器持ち込み禁止なんて言つてねーし  
「酷えつ！！」

勝者：マサキ

第一次東京大戦～チーム断罪～Sインヒジカルアサシン～（後書き）

初代と二代目は亡命しました

## 第一次東京大戦～チーム断罪VS春日野秋鬼～（前書き）

最終戦です。あえてロードオブカオスとは呼ばない（笑）

## 第一次東京大戦～チーム断罪～VS春日野秋兎～

春日野秋兎。

奴は変態だ。

見た人間は、誰もがそう呟く。

\*

「さあかかつて来い、ヒーロー共おおーー！」

秋兎が現れても、至つて冷静にくじ引きを用意するリン。

「赤を引いたらあの変態つわぴょんを相手するんだよ？」

「了解」

「嫌だなあ」

「せーので引ひづけ。せーのひ」

全員、一斉に引く。

何故か、全員赤。

「あ、ごめん。インクが乾く前に握つたせいで全部に色移りしたみたい」

「」「...」

全員が黙る。ふと、空気中の温度が5　くらい下がったかのように冷たくなった。

ニヤリと、全員が笑つた。

秋兎は何かを察したのか、一步、また一步と後ずさる。

リン「しょうがないよね」

ユイ「うん。くじ引きだし」

マサキ「しょうがねえな」

ナギ「ルールだしね」

セーマ「これも、運命」

キヨウ「だね」

トウミ「ウフフ…」

スマモ「ショーガないヨ」

アマギ「アハハ、皆さん、残酷ですねえ」

全員が、秋兎の方を向き、武器を手に持つ。

「一狩り行こうぜーー！」

ナギのかけ声と共に全員が秋兎に襲撃。

北団に、断末魔の叫び声が上がったのは言つまでもない…。

「お、秋兎金持つてゐるじやん」

「巻き上げとけ巻き上げとけ」

「サイテー（笑）」

春日野秋兎VSチーム断罪

勝者：チーム断罪

\*

東京大戦終了ー。お疲れ様でした。

第一次東京大戦～チーム断罪～VS春日野秋兎～（後書き）

「こんなやつらばっかりです

ザルツバーカグラ（前書き）

遊軍長と元諜報の、伝説の決闘

## ザルツVSカグラ

届けと願う…

その一筆に込められた  
未知なりし心

〔遊軍長ザルツVSカグラ元諜報〕

早朝。カグラの部屋に一通の手紙が投げ込まれた。真っ白な封筒には「野分神楽殿」と書かれていた。送り主は「ザルツ・クロノス」。

「んあ？ 何でアイツ私のフルネーム知ってるんだ？」

寝ぼけ眼で封筒を開封し、蛇腹状に折られた手紙を取り出す。そこには筆で

「果たし状 野分神楽殿

江東区で待つ

ザルツ・クロノス」

ニヤリと笑ったカグラは、手紙を握り潰す。

「朝っぱらから上等じやゴルア！…」

：数時間前。ザルツはカグラに「恋文」を書いていた。然し、書いてみたら全てドイツ語。一般人読めません。そこでセイラに訳して貰った。

「こんなのは簡単だよ」

素早く訳し、筆を持ったセイラが書いたのは「果たし状」だった。ええ、確信犯です。

「約束の場所は江東区にしたよ  
「すまないな」

ザルツ、まともに中身を見ずに投函。  
そして江東区。

「ザルツ、今日こそ決着付けようじゃねえかー！  
「んなー？ちよつ…カグラ待て、ぐあつー！」

ザルツ、カグラにたこなぐりにされました（笑）

〔結論〕

恋文の代筆だけはやめましょ。う。  
そして、コイツらに春は遠い…。

ザルツバカグラ（後書き）

鈍感だなあ（ ）

汝さん、お世話になつてます

## THW「ラボ・美風がチーム断罪に体験入団

ナギ「ちやん」と汝くんとの「ラボ」です。

### 「美風」のチーム断罪」

「ぴつたり～～ ジんちわー… って、あれ？」

北区某所。リン率いるチーム断罪の施設に美風は来ていた。  
只今作戦会議中。

リンは、液晶タブレットに映し出された情報を素早く白板に書き写していく。

「次の占領地は千代田区。現在、遊軍が占領に向かっている。こち  
らは放置。他の地域だが神奈川領北区32%。下がり具合からして  
千葉か埼玉の次の占領地だ。偵察隊からの報告によると、自由の翼  
の幹部数名を確認。よって千葉の占領の確率が…」

「あ、あの～」

扉の隙間、美風が気まずそうに声をかける。  
全員がそちらを向いた。

よく見ると… ロイツラケーキ食つてやがる。

セーマ「あ、美風ちゃんだ」

マサキ「輸送人だ」

ナギ「やあー美風ちゃん」

アマギ「フツ…」

キョウ「こりつしゃーい」

スモモ「びーも」

何かゆるー。美風も場のノリで喋る。

「今日一日お世話になります テヘペロ」

「マジデカ（笑）」

「じゃあ、美風も来たから、そろそろ狩りに出ようか

「……狩り？」

リンが微笑む。

直後、バンッと机に足を乗つけ、叫んだ。

「北区防衛戦じゃあ！！！パーセント？んなもん関係ねえ！やっちは  
え！！」

「血祭り！血祭り！！」

「狩り暮らしだね」

「一狩り行こうぜー！」

全員の目の色が変わった。

一気に殺氣に満ち溢れる会議室。リン以外の全員が、駆け足で出て  
行つた。

そして、外から高笑いと、悲鳴と、怒号。

「…………あのう」

「美風ちゃんも行こうか」

「あ、は、はー」

いつもハイテンションな美風も、チーム断罪のノリには勝てなかつた模様です（笑）

後ほど、返り血で血みどろになつたみんなを見て、叫ぶ美風。

THWコラボ・美風がチーム断罪に体験入団（後書き）

私、やっぱり輸送部隊がいい by 美風

新たな敵（前書き）

新章突入です

## 新たな敵

まことしやかにヒーロー達の間で囁かれる、不気味な都市伝説。東京のどこかに、死んだ者の身体を操る、死靈使いがいると…。

\*

「おいカグラ、ケンタはどうした?」

「リア充から一転、非リア充になつて嘆きながら部屋に引きこもつてゐる」

「…は?」

会議室に集まつたザルツたち。

滅多に揃わない幹部達が集い、会議室の中は満員御礼。（笑）

ザルツが一回咳払いをすると、部屋は静まり返つた。

「君達に集まつて貰つたのは他でもない。最近起きてゐる墓荒らしの件だ。スマレ、説明を」

「はい。ここ数ヶ月、死亡した能力者の遺体が盗まれる事件が発生しております。同じ事例が神奈川県だけでなく千葉や埼玉でも起きていますわ。そして同時におかしな噂が流れています」

話を一旦そこで切り、スマレが一枚の写真を取り出した。

そこに写つていたのは…

「な…なんの冗談だよ…」

黒い外套を纏つた青年。

血のようないしを携えた、死神…。

それは紛れもない、リンだつた。

一気に血の気が引き、明らかに動搖するリン。

「ば、馬鹿な…！俺はここに…」

「最後まで聞きなさい。貴方が本物のリンである事はサクラ様が証明して下さつてますわ。私が言いたいのは、今、東京に広まる都市伝説。“死靈使い”的事ですわ」

スミレは更に数枚の写真を出す。そこに写っているのは、嘗て東京を制覇する為に戦い、散つていった能力者達だつた。

「これ…傭兵のトモヤさんだ」

「ねえねえこの人、千葉のリザさんだよね！？」

「埼玉のハルキさんまで」

青ざめるメンバーに紛れ、セーマが一枚の写真を見る。

そこには、燃えるような紅い髪を綺麗に束ねた、女性が写っていた。スミレが思いつき机を叩いく。

「都市伝説は噂ではなく、事実です。彼らは現在、無差別に能力者を襲つておりますわ。操つている死靈使いも死体も、見つけ次第…塵も残さず消滅なさい」

そう告げると、スミレは一人会議室を出た。彼女にしては、手荒といつべき発言だつた。

「どうしたんだ、スミレ」

「…千葉のリザちゃん。スミレの亡くなつた妹さんだよ」

「へえ、カグラちゃん物知り……って、えええ！？」

動搖する会議室の中、リンは写真を見つめながら思った。

もし出会つて、

存在を消し去つたら

俺は  
…

新たな敵（後書き）

完全ファイクション

〔番外編〕 二二国のひとの納税者たちの口常（前書き）

二二国書きついで二二

## 【番外編】三國のとある納税者たちの日常

稼げる時に稼ぐ。

家族の為、軍の為、国の為。

そして何より仲間の為。

\*

朝の新宿区。埼玉国のハザキは、数人の仲間を連れていた。手には、スコップ。

「よーし、作業開始！！！」

「おーっ！！！」

意気揚々と始めたのは、能力者によつて壊されまくつた道路の整備。そつ、彼らは納税部隊。別名、仕事民である。

「ハザキさん、瓦礫と岩が動かせません」

「大丈夫か、シユウ。よし、みんなで押すぞー！」

みんなで団結。然し、大半がレベル10以下。

「おやあ、お困りのようだね」

「あ、千葉の…タヌキさん！」

「サヌキだゴルアー！」

そこに現れたのは、サヌキ率いる千葉国の仕事民達。

「新宿区は千葉領になつたよ。ここはアタシ達がやるから埼玉は帰りな〜」

「いや、労働時間終了まで一時間あるから無理」

「じゃあしうがないわねえ。アンタ達、やつちやこなさい。」

一触即発！……かと思ひきや、ハザキ達と協力して瓦礫の撤去を始めた。

「ち、 サヌキさん!?

「：次は無いからね」

そこに通りすがりの神奈川のミカミ率いる仕事民達が合流。三国合同の道路整備が開始。昼は各自で持ち寄ったコンバットレー ションを頬張り、作業再開。

「メモリー チップみつけーーー！」

「マジですか？」

探七探七

いや、アンタたち、仕事しなきによ

こうして夕暮れ時。

「お疲れ様でしたあ！！」

道路整備の作業終了。

お給料を貰い、喜ぶ仕事民。

「ミカミくん、帰りに『くろねこ亭』行きましょうよ」

「行こうか！」

「サヌキ～、俺達は？」

「《ほうきぼし》直行」

「うじやーーー！」

「なあなあハザキ、僕たちは？」

「もち俺の家で家飲み」

「…マジ？」

こつして仕事民達の1日が終わるのでした（笑）

【番外編】二国とのある納税者たちの日常（後書き）

因みに、店の名前は実在する「ヒコ」名です。

紅色の人（前書き）

もうオリジナル過ぎて笑える

## 紅色の人

緋色の瞳。

かつて、そう呼ばれた女性がいた。

その女性の名は…

\*

その日、セーマとアマギはザルツのパシリをしていた。

「全く…、あのお方は人使いが荒い」

「まあまあ」

「然し何故我々なんだ。もつと暇な奴なら幾らでもいるだろ?」  
「目が合つたからじゃないかな?」

「…奴は犬か」

呆れるアマギは、セーマの持つ段ボールをバシバシと叩く。  
ええ、アマギは何も持つてません。（笑）

ふと、風に乗つて、鉄の臭いがした。

「ん…この臭い…」

「血でしょ?」

「みぎやあー!」

情けない悲鳴と共に、誰かが路地を曲がつて來た。

「あ、ムクさんだ」

「どした、ムク」

「二人共、逃げて逃げて！ヤバいのがいるー。」

「は？」

ムク、鬼の形相でダッシュ。セーマとアサギの襟を摑むと、別の路地へ引きずり込んだ。

「静かにー。」

息を潜める。

ムクの来た方から、誰かが来た。

現れたのは、赤い刀を持つ、赤い髪の女性。

セーマの表情が凍る。

「あ、アサギ隊長…」

「セーマの知り合いか」

「…ええ、四国遠征の時に配属された部隊の…隊長です。殉職した

「…つ！じゃあ、あれが噂の…」

「死靈だね」

セーマが刀を抜いた。

そして、アサギの前に出る。

「ちよ、セーマ君自重ーー！」

「…僕が、引導を渡す

アサギがセーマの方を向いた。その瞳は、青白く濁っていた。それは死人の眼。セーマは唇を噛んだ。

「死者を…アサギ隊長を愚弄しやがって」

直後、セーマは神速の如き動きでアサギに切りかかった。  
一撃目を、刀で受け止められる。

アサギが炎を起こせば、セーマが砂塵で搔き消す。  
何回目かの撃ち合いの時、ガクリとアサギの体が揺らいだ。

「あ、ヤバ」

どこからか声。それをアマギは聞き逃さなかつた。

「そこ」かつ！

アマギは作り出した氷柱を、声の方へ投げた。

小さな悲鳴の後、死体は力を失い、地面へ倒れる。

ムクが、声のした方へ走るが人影は無く、地面に血痕が残つてゐるだけだつた。

「逃げられたか！」

そして、ムク達がセーマの方を見ると、セーマは倒れたアサギに向かつて砂塵を起こしていた。

「もう一度と操られないよ」…砂塵の海に…

砂が死体を包み、舞い上がる。

全てが砂へと帰した時、残されたのは赤い刀のみだつた。

「帰ろつか」

そう言つたセーマは、赤い刀を抱きしめ一人歩き始めた。



紅色の人（後書き）

アサギ隊長のエピソードもいつか書きたいお

闇の商人さん襲来（笑）（前書き）

これが最後のイベントなのかしら？

## 闇の商人さん襲来（笑）

ある日の施設。

昼飯を買い出しに行つたキヨウが、何も持たずに帰つてきた。

「トウリちゃんの言つてたパン屋さん、お休みだつたお～？」

「あら… またあの～主人、行商に行つたのね」

「パン屋が行商… だと…？」（ガタツ

そりや驚きますよね。でも個人の店はたまに行く…らしい。（実話）

「あ、そうそう。行商で思い出した。何か武器や防具を安価で売つてくれる商人がいるらしいよ？」

「ユイちゃん、それマジ？」

「うん」

「今から行つてみようか」

「リンさんいないけど… いいのかなあ？」

「セーマ、行こう行こう。最近団長立ちはだかから、たまには俺達だけで」

「マサキ君、腹黒いですねえ」

「アマギにやあ言われたくない」

そういう訳で、リンを除いたチーム断罪メンバーは、商人の出没する杉並区へ向かつた。

「ねえ、アレじゃない？」

暫く歩いた後、廃ビルの影にひつそりと奴はいた。

フードを被り、グラサンかけた怪しい男。

「暑くねえのかな…あんなに着込んで」

「マサキ君、やってみたら如何ですか？」

「アマギ、お前がやれ」

男子一人が言い争いをしている間に、他のメンバーは商人に近付いた。

「すいませ～ん」

「…いらっしゃい」

「あらん?」

トウミが首を傾げる。  
そして妖艶に微笑むと

「パン屋は副業なのかしら、おじ様」

「え…」

はい、この商人さん。趣味でパン屋やってます(笑)

「パンの行商じゃねえのかよ！…！」

「それよりも、買ってくか？」

「はい、買います」

こうして、元々防御や攻撃力が高かつたメンバーは、格安で更に強化されましたとさ。

「余談ですが、あのあと抜け駆けを指示したマサキ君は、団長にパシリにされたそうです」



マサキ。とりま、茶買つて来い

秋の夜長に歌うアホ（前書き）

アホです。パンダさん、くろねこ亭、勝手に使ってメンゴ（笑）

## 秋の夜長に歌うアホ

くリクエストで右京さん

\*

「雨酷いねえ」

神奈川国某所《くろねこ亭》。

雨のせいか、客足が遠退き氣味。といふか、元々人があんま来ない

(殴)

本日の来店者、アマギとマサキ。

「アマギさん、マサキさん、何を飲されます?」

「そうだな。とりあえず……」

二人がメニューと睨めっこしていると、誰かが店に入ってきた。

「よう、兄弟」

「あ、神奈川国自由教教祖だ」

「一人共、失礼だし、せめて名前は言つてあげて!」

そんなこんなで、神奈川国指導者・来栖右京登場。  
因みに、今の今まで名前だけしか出てきません。

「…で、教祖が本陣から抜け出して何をしてんの?まさか、一杯煽りに来たんじゃないだろ?」

「そのまさかだ、兄弟」

「うわうわマジで」

「来栖様、何をご注文で?」

至つて平然と接する店員（愛称パンダちゃん）。右京は一ヤリと笑う。

「ザルツやリンから聞いたんだが、10000%オレンジジュースつてーのがあるらしいな。それを一杯」

ガタッ！

アマギとマサキが明らかに動搖し、全力で首を横に振った。

「右京さん、ストップ！ダメ絶対！！！」

「幾らアンタでも自殺行為だ！」

「お待たせしました 10000%オレンジジュースです」

素早い動きで、意氣揚々とジュースを出す店員。

見た目は濃縮還元する前の、水飴みたいなオレンジジュース。

「んじや…」

「アカーン！…」

二人の制止虚しく、一気飲みする右京。

直後、何処からかスコップを取り出し、椅子のテーブルに足を乗せた。

「みんな、ライブに集まってくれてありがとう…。さあ俺の歌を聞きやがれえええ！！！」

「トライプしたにゃーーー！」

オレンジジュースでトリップした右京の歌は、そのあと水を飲まるまで続いたという。

10000%オレンジジュースの効果 幻覚、意識障害

対処法 水を飲ませる

秋の夜長に歌つアホ（後書き）

みゅうやるわ、コマイツ等

今では白銀に輝く時（前書き）

いの時、作者は100枚以上持っていた（笑）

## 全てが白銀に還る時

月の名を持つ

清き御靈

奇跡といつ名の

最期の加護を…

\*

夢を見た。

純白の世界。雪が舞い散るそこに、一人の少女がいた。

蒼い髪、蒼い瞳を持つ少女。

『君は…』

リンは問いかけた。少女は微笑む。

『初めまして、私はツクヨミ。カズマがお世話になつてます

少女、ツクヨミは一礼した。リンも慌てて礼をする。

『いえ、こちらこそ勝手に体に乗り移った上に使わせて貰つて…』

『いいのよ。私はもう、あの体に戻れないし、何よりサクラ様の願いですもの』

『体に…戻れない?』

『一度魂の離れた体はね、同じ魂を一度と受け付けないの』

少し寂しそうに語るツクヨミは、リンの手を優しく握り締めた。細く、美しく、温かい手。

『あの体は、もう貴方のものよ。好きになさい』

そういったツクヨミの手が、透け始めた。

『あら、もう時間みたいね』

『ツクヨミさん』

『リン、貴方に私の守りの能力を託します。これで、貴方の大切な人を護りなさい。あと…これはカズマに伝えておいて』

『私の分までがんばれ、カズきち…』

ツクヨミの輪郭が消えていく。ダイヤモンドダストのような輝きが風に舞い、ツクヨミの魂は消えていった。

そしてゆっくりと浮上していく意識。

リンが夢から覚め、最初に見たのはツクヨミである自分の姿。

『あの体は、もう貴方のものよ。好きになさい』

ふと蘇る言葉。リンは自らの髪を掴み、ナイフで切り裂いた。ぱたりと、元のリン位まで切ると、そのままどこかへ出かけてい

つ  
た。

金で白銀に違ひ時（後書き）

行つた先は無論…（笑）

リン、びふーあふたー（前書き）

作者は100コインを握り締め…

## リン、びふおーあふたー

最初の、最凶な死神、復活。

\*

ここ数日、リンの姿が見えない。チーム断罪の施設にも、遊軍の施設にも居ないので。

「リン君、どこいつちゃつたんだうつ」

ユイでさえ行き先を知らない。

誰もが首を傾げる。

ふと、ユイの携帯が鳴った。

けたたましいエレキ音（j-dk）バンドのアレ）。

「あ、リン君からだ」

「…心臓に悪い着メロだな

「もしもし、リン君？」

『あ、ユイ。今からビックリする土産持つて帰るから

「え、本当？じゃあ大人しく待ってる」

電話を切つた。

それから数分後。施設の中に呼び鈴が鳴る。

「客か？」

「ちょっと行ってくるね

ユイが玄関に向かつた数秒後、悲鳴が。

慌てて向かつたカイとカズマが目にしたのは、フカフカの特大ピカチュウのヌイグルミを抱き締めるユイ…はどうでもいい。（笑）問題は玄関にいる人物だ。青い短髪の、男性がいた。暫しの沈黙。

「ジーザあああス…！」

カズマが何かに気付いたらしく、叫んだ。そして、泣きながら去つていく。

「……？」

「カイ、ただいま」

「！…！？」

その声に、顔が引きつるカイ。

「ま、まさか…」

「俺だよ。リンだよ。ツクヨミの許可が下りたから、ジェンダー行つてきた」

「ぬああああんですつてえええ…！…！…？」

爽やかにいうリン。

確かに、ツクヨミの面影はある。明らかに拳動不審に手を上下するカイ。

「カイ、その手は何だ」

「ツクヨミの…まだツクヨミのままの方が良かつた（泣）」

「何で泣くんだよーー！俺の姿じゃ不満かーー？」

「胸が…あのリンちゃんの胸が…」

「カイ、サイテー」

リンヒュイが同時にハモる。

「うー、リンは男に戻つましたとさ…。（笑）

リン、びふおーあふたー（後書き）

ジェンダークリーチク行きました（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8784y/>

---

東京ヒーローズウォー～断罪の死神・リン～

2011年12月20日15時51分発行